神遊び唄

オピオイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神遊び唄

【Ｎコード】

Ｎ７３２８Ｌ

【作者名】

オピオイド

【あらすじ】

『いつもの日々に戻るまで』『変わる世界』と同じ世界に住む『のーてんき』な神様がゆっくりとした日々をすごすそんなお話です。

扉

ガチン。

巨大な時計と一体化している屋根にある長針が、１２を表わす神代文字を指し示す。
時計の針を動かすギミックの大きく開いた隙間から見える空に、高く白く神々しいまでの月が煌々と独り寂しく光を放っていた。
月の光に照らされて時計の大広間が蒼く染まる。
そんな中、日本に伝わる古い寝着を纏った女性が、広間の蒼さと対照的に空を見上げる姿で白く浮かび上がった。
その姿を見た者は色々な意味で息を飲んだだろう。
着物の端々から覗き出る白い肌に。
硝子細工の様に簡単に壊れそうな身体の細さに。
そして、あどけなさを残した口元より上に巻き付けた数多の神代文字を書き込んだ包帯に。
包帯で隠れた目で何を見ようとしているのかは解らない。
ただ、その姿は月と同じ様に神々しさを醸し出していた。

「何を考え込む？」

深い重低音の声が響く。深みのあるバリトンの声を聞けば卓越した精悍な老人を思い描くだろうが、優雅に振り返った女性の先には熱気を纏っていると勘違いしそうな熱い笑みを湛えた若い男がいた。
男の服は広間や女とは対照的に紅に包まれている。
短く切り揃えた髪の下にあるギラギラと輝く黒い双眸が、独り立つ女を見ていた。

「ん～？　何を考えてるって言ってもね～ただ単に月見てるだけ。」

その姿とはギャップを感じさせる程の脳天気な声。
そんな事はいつもの如く、動揺も無いままに男は言葉を継いだ。

「月か・・・こっちでも月はあると初めて来た時は漠然と考えて、思わず笑ったな。」
「ふふ、あるわよ。それと貴方の世界じゃどうか知らないけど、こっちじゃ神様。」
「ほう、神か。」

唇を不敵、且つ挑戦的な笑みに変えながら女を見る。

「ええ、神様。孤高に輝く寒々しい蒼い光、その光が罪を持つ神を殺すと言われる月の神様。」
「それはまた物騒な神だな。」

言葉とは裏腹に男は愉しそうに空を見上げた。

「そうね、とっても物騒。」

女も愉しそうに見上げた。

「だか、俺とそっくりだ。」
「え！？」

自嘲混じりの声にあからさまに反応する女性。

「何だ、その反応は。」
「だって、月を見て月の神様って言うとなんか、ナヨナヨってして

繊細な顔立ちで美形って感じでしょ？　それと比べれば。筋骨隆々、人の嫌味も笑い飛ばす、殺しても死なない人が似ているってねぇ。」

包帯の上からでも解る『一目瞭然』と言わんがばかりの笑顔。

「はっ確かにな。似てるのは神殺しだけか。」

「いいえ・・・エル、全然似てないわ。月の神様は裁きで殺しても、貴方は止める為だったでしょ。異界の炎神エルフェルト・シュレッドメイヤーは、狂神へと堕ちた友達を救う為に殺し『喰った』。」

「・・・・。」

炎神と呼ばれた男、エルフェルトは喋らない、ただ沈痛の面持ちで空を見上げていた。

そんな男に女が躊躇いもなく話を継ぐ。

「・・・私ね、貴方みたいな人知っているの。」

「俺みたいな奴？」

「ええ、貴方みたいな人。大切な人を止める為に殺して、大切な人の為に戦った人のお話。・・・聞く？」

「・・・差し支えなければな。」

「ええ。」

エルフェルトが女を見ると女は柔らかく微笑をたたえていた。

不意に空気がかわる。

「でも、少し待ってて。門が開く。」

「ほう、新しい奴が来るか。」

「ええ、ほら。」

コウ。

月の光とは違った光が時計の大広間に溢れる。
広間の床一面に描かれた神代の文字が輝く。「さて、お客様が来た。どうやってもてなそうかしら？」
女は呟くと楽しみに笑った。

強い光りが満ちる。
柔らかい月の光ではなく、強くそして何かを顕現させる様な光。
館自体が輝く。いや、光は館を包む森や大地からも発せられている。

赤、青、黄、白、漆、灰、紫、瑠璃、茶、様々な色が大時計の広間に奔流の如く渦巻いていた。

「門が開くか。」
「ええ。」

光が粒子となり何かを形作る為に、その何かに粒子が殺到していた、その光の奔流の近くにいる二人は、その幻想的とも言える状況を当たり前の如く受け止めている。

「前回の連中もそうだったが、この顕現方法はどうかならんのか？鬱陶しくてかなわん。」
「私に言わないで・・・それに、先代の『星読み』から聞いたら昔からこう見たいよ、この顕現方法は。」
「どうにもならんと言う事か。」
「そう言う事。」

エルフェルトは光から目を守るように手を翳す。
女は包帯が瞳を守っているので問題がないと言わんがばかりに、そ

の光景と相対していた。

「まあ、もう少しで終わるから辛抱してね。」

「ああ。」

それきりで興味を無くしエルフェルトは自分で沸かしたお湯を使ったお茶を飲む。

ゴウ。

音が聞こえた気がした。光が粒子が固定化し、人の形として顕現する。

うぁん。

途端に光の奔流が止まる。

そこには横たわる二人の人影。

「ようこそ、天浮橋へ。」

扉（後書き）

はじめまして！！

『変わる世界』と世界設定と投稿担当オピオイドと言います～

以前からいろいろと書いていましたが、某ＳＳを途中で打ち切ってしまってからの久しぶりの投稿です。

変わる世界やいつもの日々に戻るまでなどの根幹の部分を根ざすため、他の二編の設定ネタばれを嫌う方は回れ右推奨な話です。

ではご意見ご感想お待ちします！！

とぼっちり

「要するに愚痴なのよ・・・天文学的数字を突破して偶然来た君には訳解らないとは思うけど、もう一寸付き合ってもらえる？　ほら、食べ物も用意するからさ？」

目覚めたら此処に居た。
何時もと違うベットの感触で起きたら、周りは何処までも続きそうなぐらい広く、そこに敷き詰められているのは淡い白一色のタイル、天井は総ガラス造りの上に冗談かと思うぐらいの巨大な時計が付いている。
更に言えば周りはまだ夜で、天井の時計の隙間から月と星が見える。
寝ぼけ眼で起き上がるとタイル張りの上で寝てた割には身体が痛く無く此処に連れて来られてまだ間もないと言う事だろうと考えた。
視線を感じ横を見ると驚いた。

だって、そこには顔があった。

「うっわっ！！！」

人身をバネにして立ち上がると、そこにはしゃがみ込んだ和装の少女がこちらを見ていた。
その姿に身体が退け、絶句してしまう。
艶のある黒髪に小柄な身体、透き通るような白い肌・・・そこまでだったら良かった。

問題は顔半分を覆った物だった。
鼻の上半分から目を覆った白い包帯、その包帯には奇妙な文字が毒々しい赤色でプリントされていた。
それが花を描いた美しい和服とのギャップでハッキリ言って怖い。
腰が引けるのはきっと可愛い桜色の唇が邪悪――ゲフンゲフン――妖しく歪んでいる所為ではないと思いたい。
とそんな事を思っている内に、その少女は立ち上がってこちらを見ていた。

「ようこそ、天の浮橋へ！！　何億何兆何京以上分の一の確率で此処に来た貴女を歓迎するわ。」

何処かしら妖しげな少女は、何故か歓迎している言葉なのに口元が引き攣っていた。

「貴女、顔に出てるわよ。」

顔の包帯が無かったら物凄い笑顔で睨まれているんだろうと思った。
何故かと言えば包帯があるにも拘らず異常な程の視線を感じる。
視線で人を殺せるなら即死だろう。
だが、そんな視線がふと消える。

「さて、今回来た貴女には・・・さっさと帰って貰うわ何もせずに！！　もう面倒なのよ今日は特に！！」
「えええええ、もう！？」
「元の場所に帰るのが嫌なの？って・・・何か、いやにノリが良いわね・・・。」
「いやはは、こう言う状況に慣れてまして。何も体験しない内に帰るのはどうかとー。」

正直、私はこう言う状況には慣れていたのだ。
普通の人間――一般の人――が聞けば不可解になる言葉に目の前の包帯少女は疑問を口にせずに顔を近づけてきた。

「リード。」

包帯の文字がハッキリ見えるほど近づいて来た少女は、指を私の頭につけて呟く。

「ふーん。色々な所に飛ばされてはその世界の摂理や確定された物語を掻き乱す・・・ある意味停滞する世界を救う役割ね・・・ご大層な事。」

何かを揶揄するような口調、何か気に触ることがあったらしい。
彼女は鼻を鳴らすと、これ幸いと言わんがばかりの不安感を掻き立てるように笑う。

「うわわっ。」
「なるほどなるほど、そんな貴女なら良いわね・・・これはもう色々と聞いてもらおうかしら？丁度貴女すぐには戻りたくなかったんでしょう？これは好都合だわ！！　偶然にもマリアもエルも外に出てるし、守護役の陰険風文と泣き虫フレイヤも外回り出たばかりだから一・二時間は帰ってこない！！」

包帯少女は強引に私の手を掴むと、広大な空間の中心に引っ張っていった。
そこには三脚の椅子と楕円形の大きなテーブルが一つ。
テーブルの上には据え置きしてあるんだろうなぁと思ってしまう程の年季の入った茶筒とポット。

「何か所帯じみてる？　此処の雰囲気と比べて何かおかしくない？」
「生活する上で所帯じみてしまうのはしょうがない事よ？そんな事より、座って座って。お茶は何が良い？　リクエストには何でも答えるわよ？」

思っていた事を率直に口に出してしまった事に冷静に返してくる包帯少女は、どこか楽しそうに椅子を勧めて来る。
私は警戒心も抱かずに椅子に座る。
警戒心が無いわけではない、ハッキリ言って目の前の人物が解らない上に色々な場所に飛ばされたと言う経験上で解ってしまったからだ。
目の前でにこやかに笑っている少女は見た目通りの人間じゃあない。
人間である事すら怪しい。

「どうしたの？」
「いえ、なんでもないです。」

不審げに聞いてきているが多分、全て解っているのだろう。
ついさっきの発言が良い例だ。
一瞬のうちに私の経歴を言い当てる。
彼女が言っていた神の存在は信じるかどうかは解らない。
だけど正確には１４歳からだった私の人生は波乱万丈だった。
気が付いたら色んな世界、平行世界に飛ばされていてその世界を色々探検する毎日。
一週間の時もあったし、十年に渡る冒険かと思えば一瞬の夢だった時もある。
ある人間の話し相手の事だけもあったし、レジスタンスとして長年活躍した時もある。
魔法だって普通に使えるし、ＳＦチックな技や技術も使えるし解る。
そんな私の経歴を簡潔ながらも正確に言い当てたのだ。

ハッキリ言って、目の前の人物は今まで私が会って来た存在の何よりも不可解な人物。
そんな私の心境を知ってか知らいでか、いや確実に解っているんだろうな彼女は笑顔を向けながら聞いてきた。

「フフ、理解しようとして理解できない？」
「ええ、貴女は何者かと考えている所です。・・・ああ、答えないで下さい。私のモットーは『出来るだけ自分の知りたい事は自力で知る』ですから自力で理解します！！あと、お茶はダージリンがいいかな？」
「はいはい。」

不可解な人物は目の前で何処から取り出したか解らない紅茶の缶を開けお茶を作り出した。
正直、怖くて堪らない。
気が付いたら知らない所なんて掃いて捨てるほどあるが、こんな掴みどころの無い不可解な人物と突然のお茶会なんて怖くて仕方が無い。
だけど、私は動く事が出来なかった。
理由の一つは相手のことを知るため。
どんな事よりも相手を知る事は今後の対処に大きく関係するから当たり前の事で、自分の命を救ってくれるのを良く知っている。
長年の経験から得た勘。
二つ目は不可解な人物だが今の時点で一つ解った事がある。
目の前で楽しそうにお茶を入れている人物は、格が違う。
次元が違うといっても良いだろう。
理由は簡単、私が今までの旅で習得した技術や魔法をいくら起動しても発動しない事だ。
私の今いる世界には魔力もマナも色んな力が溢れているのにも関わらず発動しない、最初から解っていた事だがこの世界は異様なほど

力が溢れた世界。
・・・正直に言おう、発動する媒体が豊富にあるにも拘らず発動前に止められている、しかもノーアクションで。
感じる事が出来ない上に、それを知ってて包帯の下にある唇を笑顔で湛えていながら毛穴の一つ一つまでかかる抵抗を許さない柔らかなプレッシャー。
目の前の人物はとんでもない程の化け物だ。
自分の力を過大評価をしていないつもりだが、それでも差は大きいと思う。
最後に三つ目、そんな相手の前でジタバタしても何も始まらない。
此処まで差があるのならば、殺される時は何時だって殺される。
むしろ、帰してくれると言っているならば、この話は乗らない手は無いのだ。

「はい。ダージリンおまちどー。味は保障しないけどね。」
「保障って、あっえと・・・一つ聞いて良いですか？」
「なに？」
「予想なんですが、貴女ほどの人ならば一瞬で紅茶を出す事が出来るんじゃないですか？」

私は疑問を素直に口に出した。
今まで会って来た力ある人々の殆どは自分の力を誇示するように、己の力を行使していた。
それこそ、自分の力を見せ付けるように無駄な事にまで力を使って。
だが目の前の人物は力は、私の思考を読み取る以外は使っていない。

「いや・・・これは一寸理由があってさ。・・・うちにいる口煩い小舅が、言うのよ『力ある者が力を使うのは一向に構わん、当たり前だからだ。人が手があるから手を使うそれぐらい当たり前の事だ。だがな、それが致命的になる事がある。解るか？世界が閉じてしま

うのだよ。』ってさ。」
「よく意味が解るよーな解らないよーな？」
「解る解る。解りやすく言えば小さく纏まる者になるなって事。・・・そう考えると・・・あいつら・・・。」
突如機嫌が悪くなる彼女。
殺気こそ出ていないが、あまりの力の強さに肌が粟立つ。
「えーと、何か気に障ることを言いましたでしょうか？」
「ううん、言って無いわ。一寸思い出しただけよ・・・。」
彼女はふっと息を吐くと喋り始める。
「最近、技術的に発達した世界が増えてきた事は良いと思うのよ。でもね、ある程度文明が育つと次元を超えるとかそんな技術を持った連中が出てきてさ面倒なのよ。何が面倒なのって平和と安定を求めるって事。争ってくれている方が楽なぐらい。いや別に争いを肯定するわけじゃないのよ？　ただね、平和を願うことが余計な争いを生むのよ。」
話す次元が違いすぎる、最初なのにも関わらず私は付いて行けていない。
そんなこちらの事を構い無しに彼女はカップを両手で包み込むように持ちながら話し続ける。
「国の話で行けば、例えばある国が二つあるとするじゃない？　一つの国は例えば・・・そうねえ、この此処にある国が砂糖しか食べれない種族だとして、もう一つの国が砂糖だけ食べれない種族とするじゃない？」

喋りながらテーブルにおいてあった砂糖壺を二つ適当に置きながら彼女は話を続ける。

「ま、当然ながら二つの国は仲が良くならない訳よ。理由は簡単価値観が違うから・・・解る？　お互いの信条に関する事が相反してるのよ。こっちの国は砂糖しか食べれないから砂糖至上主義、こっちの国は砂糖食べれないから砂糖蔑視。そんな状態で仲良くなれるわけ無いじゃない？」

さも当然の様に言う彼女に私は反感を覚えた。
それは、私が行ってきた事を否定された気がしたから。

「でも、人は分かり合えると思います。私はそれだけの経験をしてきたから解ります！！殺したり殺されるから殺し合う、そんなのって悲しい事だと思います！！」
「あなた自身とそう言う考えを持ちうる人間だけだったら正解、全体的な意見だったらどうだろう？　限りなく少ないんじゃないかな？　考えて見なさい、全ての人間は同じように考えられない上に貴女の考え自体は甘いわ。人は争わずにいられない、群れで行動する以上支配しなければならないのよ。」
「そんな事無い！！　言葉を話せるならいつか分かり合えるはずです！！」
「それこそ無駄、支配し続ける限り争いは無くならない。世界には異なるパラダイムが存在するから余計そうなるわよ？」
「パラダイム？」
「そうパラダイム、世界の方針、世界の意思、世界の基準。それを総称してパラダイムと言う。解る？　今さっきの例えで言う所の砂糖の在り方を意味するの、その国においての砂糖のパラダイムは国によって変わる。世界だってそうよ。そして其れはね、元々その世界のみで行われねばならないの。他の世界の人間が率先して関わっ

て変えていくなんて・・・それって侵略よ。」
「ぐっ。」

思わず言葉が詰まる。
私自身がやってきた事をそのまま言われた気がした。

「・・・。」
「先日も何たら管理局とかのが偶然来たけど、記憶消して追い返したわ、くだらないと思わない？　勝手に異世界に来て、自分の理念を通し、相手のことを考えず反抗すれば武力に行使を止む終えない・・・どっちが蛮族なんだか・・・ん？　落ち込んだ？」
「・・・世界・・・力を持つ者、世界を憂う、個ではなく全を見る・・・あなたはまさか！！」

彼女は包帯に隠されて無い唇を薄く綻ばせる。
背筋に再び怖気が走り肌が粟立った。
目の前の相手の本当の姿に思い当たる、世界について憂い考える傲慢なまでの意思を持つ存在、色んな世界を旅していた際に出会ったある人種に良く似ていたからだ。
様々な世界において最高種と言われる存在。

「神。・・・なんで、こんな、私に話すんですかそんな事！！　私が数々の世界に関わっていたからですか！？」

「いや貴女だからって事じゃない、別に貴女がやってきた事は否定するつもりは無いわ。良い方向に世界が変わっている所もあったからさ。今回はね要するに愚痴なのよ愚痴・・・天文学的数字を突破して偶然来た君には訳解らないとは思うけど、もう一寸付き合って

もらえる？　ほら、食べ物も用意するからさ？」

次に目を覚ました時は自分の家のベットの上だった。
問題は体重が異常に増えていた・・・あの神様絶対八つ当たりしていたに違いない。

こんちきしょう。

本分

学校の体育館程の大広間、アラバスターホワイトの床。
天井は二十の総ガラス張り、ガラスの間には機械仕掛けの巨大な時計が仕込まれている。
天に浮かぶ月は中天にあり、薄らとかかる雲が月に暈(かさ)をかける。

「明日は雨かなー？」

その大広間の中央にポツンとある大きめのテーブルと四つの椅子の一つからその声は響く。
中央の椅子にだらしなく座り、天を見る和装の少女。
顔の上半分を神代文字を書いた包帯で巻いた白い肌の少女が、その見た目とは反し桜色の小さな唇をだらしなく開けていた。

「休憩ですか観星さん？」

そのだれている観星と呼ばれた少女に声を掛ける女性が一人。
スラッとした綺麗な曲線を持った女性だった。
褐色の肌にブロンドの髪、ハッキリとした欧風の顔立ちが特徴の大人の女性だった。

「あーマリアージュ、どうしたのー？」
「お疲れでしょうからとお夜食と飲み物を持ってきました」

そう言いながらマリアージュと呼ばれた女性は手に持っていたお盆から湯飲みと切り分けた羊羹をのせた皿を机の上に並べる。

「ありがと。一寸行き詰ってたから丁度よかった」

そう言うと観星は机の上を簡単に片付け始める。
その机の上の物は…

「宿題はかどってます？」
「正直な所、英語は苦手ー」

高校？英語と書かれた教科書だった。
溜息を一つ吐きながら観星は羊羹を一つ頬張る。

「あーダルイー」
「ふふ、しかし意外ですね。観星さんぐらいの方だったら勉強なんて何でも出来ると思いました」
「んー、そう？一応能力は使わないって約束してるから私の個人の力なんてこんなものよ？」
「神様ってのも大変なんですねぇ」

そう観星は神だった。
日本創世神話の最高神、天の御中星の二つ名を持つ『この世界』においての主神だった。
その能力は『現在・過去・未来』全てを見渡し、遍くモノに『干渉』出来る現存する神の中でも最強の部類に入る主神だ。

「まあ、私が選んだんだから意思を貫徹したいってのもあるしね」
「そうなんですか？」
「そうなの、格好良く生きたいしね」

そう言いながら観星は湯飲みの緑茶をあおる様に飲み干した。

「さてもう一踏ん張りしなきゃねー」

「なんか忙しそうですね」
「最近なんてーか、仕事が多いのよ。昨日も三件、一昨日なんかは五件だったし…あー、今日も宿題終わったら二件だ～」
ボヤキながらも彼女の手はノートを開き、包帯で覆われて見えないであろう筈の目で宿題を解き続ける。
そんな観星の横でマリアージュは、あらかじめ持参していたポットから急須にお湯を注ぎながら尋ねる。

「昨日はどんな方だったんですか？」
「ん？ああ、確か魔法使いが一人に、悲壮感湛えた勘違い系の人間のパーティが一組…後邪気眼かってのが一人かな？」
「邪気眼って…」
「だって私が『ようこそ～』って言ってんのに、人の話も聞かずに『貴様は俺を倒すために』とか何とかブツブツ言い出したんだから記憶を消して丁重にお帰り願ったわ」

ハァと肩を落としながら宿題を解いている観星の声は少し苛立ちが混じっている。
それを見ているマリアージュは乾いた笑いしか出せない、ハッキリ言って可哀想としか思えない。

「大体、最近多すぎるのよ神に勝とうなんて輩がさ。たかが人間が人の範疇を少し超えた力を持った程度で神を倒そうなんて無理に決まってるのにねえ。」
「あ、はははは…そうなんですか？」
「そうなの。気持ちは解んなくもないけどさ、無闇に人間をもてあそぶ神も多いのも確かだから。」
「観星さんはどうなんですか？」
「私は違うわよ。私そんな事する暇ないもの。」

そう言いながら観星は、顔を動かさずにコツコツと宿題を指で叩いた。

「私は高尚な気持ちも人で遊ぶより、学校の宿題のほうが忙しいわ。自分の出来る範囲で自分のことから片付ける。基本でしょ？」

確かにとマリアージュは微笑みながら、その場を辞した。

月はいまだ中天、雲はなかった。

説明してみよう！！　前編

「でさー、最近の仕事ってのが…」
「ストーーーーップ！！」

そうやって止めるのは何回目だろうか？
思わず私は肩を落としながら息を吐く。

「どったの？」

そう言いながら不思議そうな声色で聞いてくるのがテーブルを挟んで対面にいる女性。
声色と言ったのは訳がある、それは目の前の和装の女性の顔の上半分が不思議な文字を書き連ねた包帯で覆われているからだ。
しかし、そうは言ってはいるものの顔下半分の唇は不思議そうな感じで歪められているのであながち間違いではないだろう…とは思う。

「どったのじゃない！！愚痴を言うか手を動かすかしなさい！！」
「あははー、出来ればどっちもお願いしたいんだけどー」
「出来るかー！！」

そう言って手を合わせて彼女はお願いしてくるのは私と彼女の手元にある書類の山だった。
書類の内容は様々だが『各世界の情報』や『世界同士の情勢』などと言ったものばかり、その中でも私達がやっているのは『高校化学』と銘うたれたプリントだった。

「てか、なんで私また呼び出されて此処でこんなことしてんの？」

「私達友達じゃない？だから人手が足りなくて呼んだのよ？」
「えええぇぇ…この神様、才能の使い方を絶対無駄使いしてる！！
それにいつから私達友達？前回初めて来た時に私、あなたに名前を名乗んなかったよね？」
「なに言ってるの？あの夜私の愚痴を一晩聞いてくれたじゃない、それだけで私はもう友達だと思ってるから。それに名乗らなくても解るわ、あなたの名前は『オリキャラの女の子』略してオリ子よ…ありがとうオリ子のお蔭で明日の宿題何とかなりそう」
「一寸待てーいろいろ突っ込みたい所もあるけど、オリ子って何ー！？」

手を動かしながらの絶叫。
もう何と言うか、明らかにこの目の前の宿題（モノ）が終わらないと帰して貰えない感じだ。
やっている事は神様なのに悪魔に近いと言う…なんて理不尽。
まあ、取りあえずは帰してくれるのは解っているし逆らっても無駄だと解っているので私は今出来るだけの事をしようと手を動かす。

「そういえば」
「どうしたの？」

この間の八つ当たりの時から聞きたかった事を少し聞いてみる事に。

「この世界ってどうなっているんです？と言うか此処の世界は私の世界なのかと？」
「う～ん、どうなってるかー。」

そう言って彼女は宿題に顔を向けていた顔をこちらに向けて考え込む。

「この世界の成り立ちは一概に言って難しいのよ、まあこの世界は貴女の世界との時間軸が大きく違うのだけど」
「時間軸が大きく違う？」
「そう、量子学の多世界解釈や宇宙論で言う所のベビーユニバースなんかが有名だけどさ、全ての私達人の形を持つ者が知る世界には一つの絶対的共通なものがある、それが時間よ。」

そう言いながら彼女は手を振り上げると、アラバスターホワイトから反射した淡く白い光で包まれた大広間のあらゆる場所に数多の映像が投影される。
砂漠の風景もあれば森の風景、サバンナを駆け巡る馬のような八本足の生物や海の底に棲むクラゲの様な生物の集落やら様々なものがそこに映し出されていた。
その幾つかには以前私が行った世界の風景や顔見知りの人間が生活しているモノもあった。

「解る？これ全てが今私たちがいる時間軸に合わせているの」
「本当だ、以前一緒に戦ったヨシュアがとっても若い…世界によって時間軸が違うから一箇所の世界に合わせると時間が時期が変わるって事なんでしょうか？」
「まあそんな所、世界は無限にあるって事は覚えておくといいわ。」

そう言って彼女は手を振ると映像を一気に消し去った。

「もう一つの質問に答えましょう。この世界の成り立ちよね、突然だけど世界の壁って厚いと思う？」
「えーっと。そう一概に言えません、その純然たる証拠が自分自身ですから」

私は自分を指差しながらいう。

私はあらゆる世界に移動したりして冒険をしている。
そう、世界同士は意外と薄いそれを立証しているのは意外と自分自身だ。

「正解ー世界の壁は意外と薄いと言うか無きに等しいの、あくまで私が認識する世界ってのは電波の流れのように流れる世界、それにうまく重なるように世界同士が重なっているってだけだから」
「よく解りません、と言うか想像出来ず理解できません」
「仕方がないわね」

再び現れる空中の映像、今度はかなり広い画面に世界と書かれたシャボン玉のようなものが管で他の幾つものシャボン玉と繋がっている映像だった。

「これは？」
「ベビーユニバース論を解りやすく映像化したものよ、ほら世界と世界が量子トンネルで繋がってる」
「…ごめん、勉強は苦手」
「よく異世界で生き残れたと思う」
「余計なお世話」
「あはは、これは大まかな世界の成り立ちだけど、実際はもっと細かく起こってるのよこれ」

そう言われて気付く、私の事か。

「そう、その通り。意外と世界には簡単に穴が開く。大概は偶然、あと多いのは世界の意思か神の意思か人の意思か、どれかは解んないけどねー」
「何となく理解してきました」
「そう、良かった。」

何となく落ち込んでくる。
私が使命感を持ってやって来た事、その切っ掛けが偶然…なんか複雑な気持ちになってくる。

「いいじゃない、偶然でも貴女が求められてあなたの運命を全うしたと思えば」
「…ありがとう」
「それより話の続きね、まあ偶然とはいえ世界からはじき出されたエネルギーや物…大抵は他の世界へと流れるんだけど、何百万分の一よりもっと少ない確率、天文学的な数字の確率でどの世界にも流れ着かない場合があるのよ」
「え？まさか？」

「そのまさか。この世界はあらゆる世界の中でもあらゆるモノが流れ着く最果ての地。『天の浮橋』よ」

説明してみよう！！　前編（後書き）

大学生活が忙しいので少し執筆が遅れております。
気を長くしてお待ちくださると喜びます！！

説明してみよう！！　後編

「山から染み出る水がエネルギーとすると川の流れのように纏まったエネルギーは何処に行くのか？水ならば海、漏れでたエネルギーなら？その終着駅の一つが此処なのよ。」
「今一よく解りません」
「だよねー」

なんか専門的な話が間にあって、それを抜いて話して貰っているのであろうけど私について行ける頭がなかっただけだ。
まあ、なんか変な雰囲気になったけど、空気が抜けて妙に軽くなった感じだ。

「まあ理論はともかく、ぶっちゃけあらゆる世界から流れた様々なモノが集まる場所って認識してればいいわ」
「何か凄い所ですね」
「それぐらいの認識でじゅーぶんよ」

話しながらも大分課題の方も終わった様で彼女は手を止めると簡単に纏めて脇においていた鞄へと入れる。
それが終わると今度はテーブルへと手をかざしお湯の入ったポットとティーセットを文字通り出現させる。

「便利だよねその力、以前もそんな力を使う人とあった事あるけど…すごくスムーズだ」
「そう？私ぐらいの存在になると、これ位は当たり前だと思ってたけど？」
「どの世界の当たり前だ、馬鹿者」

突然の声に私は振り向いた。
大広間の天井を支える四方の壁にある観音開きの扉から一人の男が入ってきていた。

「誰？」
「うちの居候兼私のボディガード」

彼女に顔を近づけて聞けば、あっさりとした返答が帰ってくる。
あいにく夜の帳が落ちているので、その人物像はハッキリしていない。
しかし、その男が近づけばその輪郭はハッキリして細部もよく解る。
筋骨隆々とした上背のある身体、特徴的なのはそのアッシュレドッシュの髪の色とふれるもの全てを焼き尽くすような精悍な瞳だった。

「誰だ？」
「オリ子ちゃん」
「そうか」
「ちょっと、流さないで欲しいんですけど。それと私の名前は…」

相変わらず私の名前を捏造する彼女、そしてそれをさも当然のように流して椅子に座る二人に私は慌てて名乗ろうとする。
が、唐突に差し出されて手によって遮られるた。

「はじめまして、私の名はエルフェルトと言う」
「あ、えっと。初めまして私は…」
「ストップ」

そして気を取り直して名乗りを出ようとするとまた遮られる。

「ちょっと何で私の名前を聞いてくれないの？」
「何でと言われても、ねえ？」
つどつど遮られる事に文句を言うと彼女はエルフェルトと呼ばれた男を頭を傾げながら向く。
顔を向けられた男は小脇に挟んでいた雑誌をテーブルの上に置くと、いつもの場所と言わんがばかりの自然さでテーブルの端の椅子に座る。
「悪く思うな、我々高位の神にとって君ら人間の名前は簡単に呼べんのだ」
「どう言う事ですか？」
目の前でゴールデン～ゴールデン～ル～ル～と歌いながら紅茶を淹れる彼女とは違い、目の前は厳格さを感じた私は思わず姿勢を正して聞いてしまう。
「君は物理学や量子論は得意かな？」
「…えっと、ごめんなさい。物理は苦手です…さわり程度ならば、後量子学は全然…」
「ならば、簡単に話そう。あらゆる物にはエネルギーが宿る、それは君ら…ああ、すまないもっと簡単なほうがいいか」
「はい、異界の魔法とかはそう言うのは学んだんですけど物理とか化学はこれくらいしか」
そう言いながら私は手伝わされた彼女の宿題を見せる。
すると、彼は眉間に皺を寄せながらも優しげな声で答えてくれた。
「根本は変わらない、ただ日本語が英語やマシン語に変わったぐらいにしか過ぎないんだ。例えばだ、炎を出せるか？」

「はい」
炎を出す事は問題ない、力の大元・大気中のマナを取り込み自分のイメージする炎を思い描いて出すだけだ。
幸いこの世界のマナは異常なまでに濃い、さっきの説明どおりならばこの世界のエネルギーレベル最高位にあるのだろう。
私は炎を掌に出し掲げ見せる。

「ふむ、詠唱も無しに出すとはそれなりの腕は持っているようだ。」
「ありがとうございます」
「さて、今出してもらっているその炎、君の認識としては炎を作ったただとおもう。しかし、それは見方を変えれば違う。君のイメージが君の認識したエネルギーの低い空間を、支配して炎と言う事象を引き起こしているに過ぎない」
「？」

難しい…私は彼が何を言っているのよく解らない。
しかし、何となく解った事もある。
以前魔法を学んだ時に、先生に言われた事がある『我々の認識した世界はその個人個人にしか解らない。だから、お前が赤と認識していたとしても他人には青と同じ色だと思っていてもある人間には同じ色と思うだろう』と。
恐らくは、今言われた事もそれと同じなのではないだろうか？

「まあ、何となくでいい。最終的に言える事は我々支配力が溢れんばかりの我々が君の名前を安易に呼ぶと、存在レベルで支配しかねないと言いたい訳だ。解ったかな？」
「何となく…ちなみに難しく言うと？」
「量子トンネル効果や量子ジャンプによる共鳴効果の説明…ああ、この世界の波動学の『存在と波』の講義で全３５コマ…だが」

「すみませんでしたー」

何となく、平謝りしたくなって素直に謝っておくことにする。
そして、気づいた事もあり私は彼女に向き合う。

「それと、ありがとう」
「ん？何が？」
「貴女が私の名前を呼ばない訳、私に友達だって言ったのが本気だって解ったから…ごめん」
「別にいいわよ…」

それは彼女なりの優しさで、対等な友達と言う関係になりたい意思の表れだったんだと私は思った。
だから、私は気付けなかった事に対して謝った。
そうすると彼女は、桜色の小さな唇を尖らせ、顔を他所へと向けていた。

「もう、謝罪ぐらい素直に受け入れてよ…それとオリ子はやめて、せめてもうちょっとカワイイ愛称を…」
「却下ー」
「ちょっ、何で！？」
「今の流行だからー」

騒ぎながら、夜の闇はさらに深くなる。
今日はなんだか楽しい日だ。

天の浮橋　前編

世界は闇に閉ざされた。
古い言い伝えによれば、それは古の魔王と言う現象によるものらしい。
起こった理由は二つある。
一つは世界の成り立ちだ、世界が生まれたときにまず光があった。
しかし光がある所には、影がある。
光は天に上り太陽となり、影は地に降り大地になる。
それが一つ、もう一つは世界に生き物が増え、ある一定の水準に達した時だ。
地に降った影が凝り固まったのが大地で、そこより生まれたのが人などの動植物だ。
大地だけで凝り固まっていれば問題はなかった、生まれた動植物が問題だったのだ。
その世界において生物は死ぬ度に見えないほどの影を噴出すのだ、普通の生物の営みだけならば空へと散った闇はゆっくりと大地に降り注ぎ地へと帰るのだ。
しかし、世界にとって予想外の問題が起きる。
人間同士が争いだし、大規模な戦争が起き大量の死が蔓延したのだ。
濃度が濃くなった影『闇』を身体に蓄えてしまった植物や動物がモンスター化し世界を荒らす。
さらに問題なのが闇が生まれる前の胎児に宿った場合、『魔族』となるのだ。
世界の光と闇のバランスが崩れ、世界が混沌に包まれる。
光と闇が混ざり、世界が始まりに戻ろうとしていた。

さすがに、此処まで来ると世界も慌てるせっかく此処まで安定した世界を元の状態にも出されるのは困ると言う事だ。
そしてそれを打開するのが『魔王と勇者システム』だ。

世界の果て、その中でも闇の濃い場所にその城『魔王城』はあった。
その城の最深部、王の間へと続く扉の前に彼らは居た。

「みんな良いか？　これが最後だ」

扉の真正面に立つ男が振り返り、自分の後ろに立つ面々を見回して言う。
軽装の皮鎧を着けた彼の後ろに立つ人間は様々だ、戦士風の重鎧を着た男、弓矢を背負ったエルフ、ローブを着た魔術師風の女、何かしらのシンボルをあしらった法衣を着た男、そして魔族の肌をした見目麗しい女。
バラエティに富んだ編成だが、ここまで来るまで色々な事があったのだろう。
それぞれの目には色々なものを越えてきた色があり、何かしらの決意の光があり、信頼を持った表情があった。
扉の目の前に立つ男は、それぞれの目を見回し一つ頷いた。

「俺達の旅を終わりにしよう！！」

そして扉を開く。

マリアージュ・ブランケット、フランス生まれのアラブ系フランス人。
褐色の肌を持つスレンダーな体型で、栗色の長い髪から覗くその美貌はその整った顔つきからは反し柔らかく、聖母のような印象を持つ女性だ。
彼女の仕事はこの地『天の浮橋』のハウスキーパーのようなものである。
何故、様なものなのかそれは…。

「こんにちは。こちらではお顔を見ない方々ですが、どちらさまでしょうか？」

マリアージュはバンと開け放たれた扉から見える六人の男女を見て、深々とお辞儀をした後で笑顔で問いかけた。

「ａｎｐａｎｐ：ａ！！」

それに対する答えは意味不明の未知の言語。
どうやらこちらの言葉が通じていないらしいと判断したマリアージュは、ハアと肩を落としながらもう少しコミュニケーションをとろうと思った。
しかし、その思いも空しく一番嫌な形で終わる。
相手の戦う意思が感じ取られたからだ。
仕方がありませんね、とマリアージュはあきらめた顔でスッと右手を水平に上げた。

「ｓｔｎｉｔ：ａｏａｈｅｎ！！」

何かしらの詠唱と思われる力が後衛の魔法使い風の男から放たれる。
それは人の大きさほどの巨大な炎球、当たればただじゃすまないどころではない人一人が灰になってしまうほどの白い炎だ。
自分の命に関わるほどの高温の炎球、それに対してマリアージュは形の良い細い眉毛を崩さず見えないものを掴むように手を握りこむ。
するとどうだろう、マリアージュへと進んでいた炎球が一瞬にして潰されて散らされる。
それに驚いたのは後衛の魔法使いではなく、それと同時に炎球の影から矢を射っていたエルフの女性だった。
もしも、炎球を受け止められた時の為にと、ノーモーションで気付かれないように三本射っていた。
しかし、それは思いもがけない結果で無駄にされる…それは炎球ごと潰されたのだ。

「ｖｔａｎｏｉｍｇｐｉ！！」
「何を言っているか解りませんね。…これは観星さんを待つしかありませんね」

相手もさるもの、動揺も一瞬で落ち着き前衛の二人の人間が神官風の人間から掛けられたので魔法だろう、人ではありえないスピードで突っ込んできた。
重戦士の幅広の剣と皮鎧の男の長剣がマリアージュに迫る。

「！！」
「通りません。我々神に連なる『能力者』には、あらゆる力を減少させる『神域』があります。それと私には見えざる盾と矛がありますので勝ち目はありませんよ？」

前衛の二人が驚きに固まる、それもその筈だマリアージュの目前五センチで見えない何かに阻まれたように剣が止められていたのだから。

「言葉が通じないので一方的になりますが…『西方天』『コンプレッサー』のマリアージュ。それだけを覚えておいてください、いきます…」

殺気と言う程ではないが、優しげな笑みを浮かべるマリアージュのその姿とは裏腹に裂帛の気配が立ち上る。

「ただいまー」

日常の一コマのような声が上がるまでだったが。

天の浮橋　中編　（マリアージュの日常）

「ただいまーって？」

帰ってきた観星こと天の浮橋の主人は、その状況を見て固まった。
固まったのは戦っていた男達もそうだ。
いきなり『魔王城の王の間』に突入したら負けそうになった挙句、
この状況だ固まらない筈がない。
しかもセーラー服にブラウンの鞄を背負った観星、その顔に巻かれた包帯は変わる事はない観星だ完全に戦闘の雰囲気をぶち壊している。
が、ぶち壊した本人観星もいつもの余裕も忘れて固まっていた。

「えっと…マリアさん何をしてらっしゃるのでしょうか？」
「私の本来の仕事『侵入者の排除』ですけど？」
「あーごめん…彼らちょっと待ってもらって？」

そう言うと観星は出てきた扉へと帰っていく。

マリアージュの仕事はハウスキーパーもどきだ。
家の管理や使用人の管理などを行う、女性版執事の総称でもある。
もどきと言ったのは彼女の役割が家事や掃除、それと先も言っていた『侵入者の排除』だからだ。
その彼女は今、彼女自身の城とも言える台所で家事を行っていた。
十数人で作業しても楽に料理が出来るほどの大きな台所、そこで彼

女は一人静かに料理をしていた。
かたわらの台に置いた大量の桃を前に悪戦苦闘中である。
その台所に一人の男が現れる、くすんだ赤髪の男エルフェルトである。
片手に雑誌を持ち台所の中を見回しマリアージュを見つけると声を掛けた。

「マリア、少しいい…どうしたんだこの桃？」
「先日いらした栞さんが持ってきてくれたんですが、どうも量が多すぎたようで傷むと不味いんで早々に処分する為に桃のコンポートとタルトを作ろうかと…種がめんどくさくて大変です」
「ふーん。しかしすごい量だな」
「ええ、これでも減ったほうです。当初は3キロあったんですから、取りあえず甘さ控えめとカスタードを入れた二種類作りますからねー」
「大量のモノを持ってくる栞のやつ、相変わらずだな…」

フムフムと鼻を鳴らしながらエルフェルトは、片手に持った雑誌を入り口付近の台に置くと腕をまくりマリアージュの横へ立つ。

「少し手伝おう」
「いえ、良いですよ！？　一人でも何とかできますし」
「いや。いつも君一人でやらせてるから、少しは手伝おうかと持っている年長者の気遣いだとって置きたまえ」

そう言われるとマリアージュは何も言えなくなる、彼女はただ笑顔でありがとうと返した。
二人はそのまま作業を続ける。

「そう言えば、観星の奴は何をやってる？」

「何をと言えば？」
「よく解らんのだが、でかいモンスターの人形をどっからか引っ張り出して遊んでいたが何だあれは？」
話しながらも二人の手は止まらない、エルフェルトの手は手際よく桃の皮をむき種を簡単に抉り出していく。
処理した桃をマリアージュが切り、あらかじめ作っておいたアーモンドを混ぜた生地の上に並べていく。
「よくは解りませんが。観星さんのバイトらしいですよ？　この際だから魔王に勝つための特訓をーって言って、元気一杯でしたけどエルフェルトさんは知っていますか？」
「まあ、知ってはいるな多分『世界再生会』の方からの依頼だろうな」
「『世界再生会』？　あれ？　生地が足りない」
マリアージュは手早くカスタードを作りながら足りない生地をもう一度作るため薄力粉と発酵バターを宙に投げる。
するとどうだろう空中で薄力粉とバターが何かに揉み込まれるかのように混ざりだす。
更に置いておいた卵も空中に浮かせると卵に皹が入り、そこから吸い出されたかのように卵の中身のみが出て生地へと混ざる。
「上手いものだ。そう『世界再生会』とは観星の奴が所属している『主神組合』の勉強会みたいな所だ。内容としてはいかに世界を傷つけず世界を新しくするかという所に焦点を絞っているらしい」
「何か良く解りませんねぇ。あ、エルフェルトさん火、お願いします」
「任された。解らなくても仕方がない。世界とは滅びるをして滅びるものだ、いくら救おうとも再生されようとも滅びるときは滅ぶか

らな」

そう言いながらマリアージュは宙に浮かせたまま薄くタルト生地状にした中にカスタードを流し込みエルフェルトに渡す。
それを受け取ったエルフェルトは持った状態で指を一回鳴らす。
するとどうだろう、エルフェルトが手にしたタルトが一瞬にして焼成された。

「エルフェルトさんが居るとオーブンがいらなくて良いです」
「能力の平和利用か…くだらない使い方だという奴も居るかもしれんが、良い使い方だ」
「ありがとうございます。そう言う事を言ってくれるエルフェルトさんの在り方に今日も感謝です」
「神の花嫁たる君に言われるとむず痒くてたまらん」解ったと

その時だった、地を揺るがす様な激しい揺れが二人を揺らす。

「あらあら…」
「…観星…」

遠くで響く小さな爆発音と、無邪気な観星の笑い声。
なにやら面白そうな笑い声が響いているが、洒落にならない程の音が始まっていた。
エルフェルトは手に持ったタルトを置き、眉間を揉みながら扉へと歩く。

「ちょっと止めてくる」
「ハイ…ああ、エルフェルトさん観星さんに今日は紅茶と緑茶はどちらが良いですかと聞いててください」

わかったと溜息混じりで出て行くエルフェルトを見送ると、マリアージュは次の料理の為の鍋を取り出した。

「今日も平和ですね」

どこがだ？

天の浮橋　後編　（エルフェルトの日常）

災難というべきだろうか？
異世界の勇者一行は、泣いて良いのか笑って良いのか解らなかった。
始めは彼らの世界の魔王城の王座へと続く扉を開けてから。
今までの城の内装とは違う、光に満ちた広大な空間、柔らかい白で統一された床石、そしてその中心に居る褐色の肌を持った女性。
最初は敵だと彼らは思っていた、自分達の世界において褐色の肌を持つ人間は大体が魔族だからだ。
だから、自分達はいつもどおり必殺の連携で攻撃した。
しかし、彼らにとって相手はとんでもない相手だった。
魔力や精霊を使うような力の収束も無しに、ノータイムで魔法使いが放つ炎球を同時に放った矢ごと見えないナニカで握りつぶしたのだ。
彼らの『常識』上においてありえない自体、動揺がチームの中に走る。
だが、そんな動揺を振り払うように『勇者』が前に躍り出た、ここで心を折られるのは得策ではないからだ。
勇者は共に出た戦士と共に、渾身の力をこめて刃を振り下ろす。
しかし、それはまたしても見えないナニカによって止められる。
勇者は一瞬死を覚悟し、それを打ち消すように動こうとしたその時、おかしな状況に持って行く者に出会う。

エルフェルトは、この世界のモノではない。
と言うか人ですらない。

その正体は虚空より生まれ、数多の世界を食い尽くした究極の炎神だ。
始まりは何もない場所、『無』より出でたエネルギー性の名も無い揺らぎだった。
それが何時しか爆発的に膨らみ、混沌の海に浮かぶ世界を食い成長し、意思を持った無形の神となった。
更に幾つもの世界を食い続けている、ある日彼は自分と違った方向で進化した神に出会った。
その神の名は『天之御中主神(あまのみなかぬしのかみ)』と言った。

ゴウと何かが焼ける音と燃えた煙の中、勇者と呼ばれた男は体勢を立て直してバックステップで後ろに下がり様子をうかがう。
煙がはれる中勇者の目にはゆっくりとその頼もしいと思える背中が現れた。
上背のある筋肉質の長身、短く切りそろえたアッシュレドッシュと呼ばれたくすんだ赤い髪と合わせた様な鮮烈な赤色の服を着た男だ。
その男の向こうには先程までは大きさや幾つもの角をつけながらもかろうじて人型をしていたはずの巨大な化け物が、肉塊に触手をつけた姿を変え蠢いていた。
化け物はと言えば、焼け焦げ炭化した自分の触手を動かして動揺して居るのだろうか？蠢くばかりで動きは見られない。
その化け物と相対しながら背中を向けた男は、こちらも振り向かずに溜息交じりの声で勇者に問いかける。

「一つ聞きたい。何でこうなった？」
「えっと、そこで足滑らして気絶している子が」

勇者は少し離れた所で転がっているものを指差す。

それは和装の少女。
長く艶のある髪は放射状に散らばり、形の良く桜色の小ぶりの唇はだらしなく開けられていた。
所謂すっころんで頭を打ちつけ気絶している状態で情けないにも程があり、いつも通りなのは彼女の顔上半分を包む神代文字が書かれた包帯だけだ。

「それで？」
「此処の場所の意味を教えられて、俺らを帰す前に鍛えるからとか…今神々の中で流行の異世界転移育成系キタコレ！！とか言い出して…」
「もういい、聞いてて頭が痛くなってきた…なんで目も前の奴より味方の発言でＳＵＮ値を削られにゃならんのだ…まあいい」
男は目前の化け物の真正面に立ち、拳を握り肘を後ろに引き構える。
その構えは、鷲が空を飛び立つ為に翼を引き絞る姿。

「何処の神が作り出したか知らん。だが、この地においての争いは全て私に任されている。仮初の命と言えど全力で相手させてもらう…悪く思うなよ？　私の流儀だ」
瞬間、男が爆発したような音と粉々に砕け散った床石が舞い散る。

「何、一瞬だ」
瞬きよりも短いその刹那に男は化け物の懐（？）に入り込み軽く小突くようなショートアッパーを繰り出す。
すると、その殴られた場所を中心に化け物の身体が凹み軽く浮き上がる。

「さらばだ、十字砲火（クロスファイア）」

再び男が爆発したかの様に動き、その次の一瞬には化け物の身体が大きく抉れ崩壊していた。
あまりの速さに誰も見ることが出来ないその動き。
見ることが出来る人間が居たらその動きは、上下左右のコンビネーションからの右ストレートを見てボクシングの動きだと解るだろう。

「まったく、これがいつもの日常とは…いささか問題だ」

溜息を吐きながらは事後処理をするために男は訪問者達に向き合った。

時は少し経ち夜。

天に昇る月は三日月、周りに散りばめられた星が弱められた月の光の目を盗むように輝いていた。
そんな空の下の天の浮橋では…。

「あだだだだだっ！！　えっエルフェルト痛い痛い遺体！！」
「ほう…まだ冗談が言えるとは、反省していないようだな…！！」

いつもの大広間の真ん中で二人の男女が取っ組み合いをしていた、いや一方的なお仕置きの様相を呈しているが。
一人は今は暴れまわった傷跡も無い大広間の、破壊の根源たる男・エルフェルトが、包帯の少女主神・観星にお仕置きアイアンクローをかけていた。

「あれほど後先考えて行動しろと言・っ・た・の・に！！　無節操に遊んで神の威厳を落とすとはどういう了見だ！！　後、あんまり下らん理由で私の手を煩わせるな！！！！」
「あだだだ、頭つぶれるって…味噌がっっっ味噌がでる！！」

そんな二人のじゃれあいのような物をよそ目に、マリアージュはお茶を入れながら呟いた。

「いつも通りの日常…ですね」

マリアージュ（前書き）

今回のシリーズは全体的に少し短いです

マリアージュ

天の浮橋の名前は当たり前の事ながら普通の地図には載ってはいない。
この場所の正確な場所は言えないが、日本国内とだけ記載しておこう。
空から見ると王冠の様な山に囲まれた盆地になっており、その中心にある時刻館と館に寄り添うような小さな湖とそれらを包む深い森。
その深い森には切り裂いたかのような白い筋が山に向かって流れていた。
白い筋の正体は、真っ白な玉砂利を敷き詰めた車一台が通れるほどの道。
道は途中から湖から流れ出る小川と並走し、冠状になった山にある唯一の切れ目に繋がる。
その道は、天の浮橋と外界とを繋ぐ場所。

『葦原渡坂』と呼ばれていた。

道と山の境、道に寄り添うように流れる小川の岸には葦が鬱蒼と生えている。
昼に訪れればとても長閑な光景だろうが、現時刻は日付が変わる時間。
冠状に聳え立つ断崖絶壁の圧し掛かる様な存在感と相まって、絶対の拒絶感を放っていた。
それは仏教に伝わる結界と似た空間。
月明かりでほんわりと白く浮かび上がる玉砂利の道に黒い人影が五つ。

黒さは死神を思わせるような黒さ、見たもの目には白い玉砂利の上ゆえにその黒さは禍々しく映る。
それもその筈、黒い人影達の足には軍用のブーツ腰にはナイフと拳銃、頭にはスッポリ被った覆面と揃いの暗視スコープ。
見るからに戦う者の姿。
その怪しい人影の一人が唐突に頭――耳辺り――に手を当てる。

「はい――了解」
「何を了解したんですか？」

唐突に割り込む女性の声、訓練された動きで人影の銃口が一斉に声のした方へと向く。
人影達がいた場所からおおよそ5メートル、玉砂利を敷き詰めた道の真ん中に女がいた。
白いワンピースに黒い編み上げブーツ、長い黒髪に褐色の肌。
彼女は幾つもの銃口に晒されながらも口元にたえず湛えられた笑みを絶やさない。
この場においての彼女の笑顔は聖母を思わせるような優しげな物で、いささか場違いだろう。
そんな違和感を押さえ、誰かと話していた男が銃口を女の眉間から離さずに問いた。

「貴様…何者だ？」
「私は時刻館に住む、ただの住み込みハウスキーパーですよ？」

笑顔を一切崩さずに言い切る女性を、男はマスクの下で鼻を鳴らすように嗤う。

「馬鹿な事を。ただのハウスキーパーが、我々にこの距離まで接近に気づかせない事はおかしい」

「あらあら、自信満々ですねえ。ですけどこの距離まで近づいたのは事実ですし？」

コロコロと鈴が鳴る様に笑うマリアージュ。
人影達は戦慄していた、先ほどから人影へと放っている殺気と突き付けられている銃口。
それにもかかわらずに笑い続けるマリアージュに、彼らは逆に圧倒されつつあったのだ。

「さて逆に質問させていただきます。今宵この時間帯に当地に来訪予定の方はいない筈ですが…どなた様でしょうか？」

発砲。
銃口から弾けるマズルフラッシュ。
発砲した人影はマスクの下で口を歪める、それは仕留めた笑みではなく…恐怖を象った笑みだった。

「もう一度聞きます…どなた様ですか？　以前いらっしゃった桃山の方でしょうか？　それともＣＩＡ？　原理主義の方？」

言葉は丁寧だが、女の言葉は人影達には一切届かなかった。
その視線は笑顔で語る女の目の前。
宙に浮かんだ縦に醜くひしゃげた弾丸。
その状況に人影達は同じ言葉が頭に浮かべた。

『能力者』と。

マリアージュ　その２

能力者と呼ばれる人種がいる。

その人種の数は世界で約二万人弱。
総人口６０億と言われる中ではほんの微々たる数だ。
しかし、その少数の人間はある方面で恐れられていた。
その方面とは。いわゆる闇の世界とか裏の世界とか言われるバイオレンスや非合法の世界。
裏の世界に伝わる話によれば。

曰く、能力者は己が世界を通し、すべてを見通す。

曰く、能力者は万物を己が剣にて操る。

曰く、能力者は法則を作り世界を作る。

その能力故に彼らは恐れられる。

黒い人影達に先ほどとは比べ物にならないぐらいの戦慄が走っていた。
荒事に慣れている人間達で構成されているのだろう、その戦慄の度合いは正確だ。
彼女、能力者マリアージュの危険性をよく知っているからだ。

それともう一つ、アサルトライフルの弾を能力で防いだという事実。

「全員散開！！　誰でもいい目的地へとたどり着け！！」

それを見た男の判断は早かった、能力者の危険性を考え一所に集まると全滅すると判断し全員を散開させた。
声を聞いた途端、人影達は軍人の様な――いや実際軍隊にいたような動き――規律の整った動きで散開を始める。
しかしマリアージュにとって人影達の動き、その目的は許せるものではなかった。

「それは許可出来ません・・・貴方達のような血の匂いのされる方達は、祓わせて頂きます」

彼女はすっと手を水平に上げると、道に寄り添う川の方に向かって振り払った。
ゴウッと突如巻き起こる轟風。
それは人すら一瞬にして空へと軽がる吹き飛ばす轟風。
塵の様に吹き飛ばされた黒い人影達は、水飛沫を上げながら次々に川に落とされる。
その光景を見たマリアージュは何かを思い付いたかのように、ニッコリ笑って手を振り上げる。
視線の先には人影が落ちた川の上流。

「潰れなさい」

瞬間、川の上流側の水面が一気に潰され水深が一気に浅くなる。
その結果は、すべてを押し流すかの様な猛烈な濁流。
どのような能力なのか、どのように行っているのかは解らない、その水の流れは少ないながらも勢いはさながら鉄砲水の様に荒れ狂い、

川の中に落ちた人影を飲み込み下流――天の浮橋の入り口側――へと押し流していった。
流れていく黒い人影達をマリアージュが見送っていると、再び連続で響く発砲音。
再び現れるひしゃげた弾丸、笑顔のマリアージュの表情は一向に崩れない。

「あらあら、一人残りましたか？」
「戯言を、ワザと残した癖によく言う・・・その褐色の肌、不可視の攻撃・・・貴様、『西方天』だな？」
「いえいえ、そんな大層な者じゃありませんよ」

再び二連射して距離をとる男。マスクには憎々しげに歪めた唇が写る。

「そんな大層な者ではありません・・・私はただのマリアージュ、『神の花嫁』です」
「っっっっく、なお悪い。ブランケット家の『花嫁』！！　『コンプレッサー』のマリアージュ・ブランケットか！！」

男は自分の言った事実に恐怖する。
その名にどんな意味があるのか一向に解らない、だが先ほどまでの戦う意思がこもった瞳には力なく、構えたアサルトライフルを乱射した。
しかし、銃弾は一つとしてマリアージュに届かない。
銃弾は全てひしゃげて宙に浮いたままになっている。

「Ｍ４Ａ１カービン、装備を見る限り海兵隊の方でしょうか？　…しかし、懲りませんね以前デルタフォースの方がいらっしゃった時も同様にお帰り願ったのですけど？」

「だっだまれ！！　貴様達のような化け物が人に楯突くなぞっ！！」
「貴方こそ黙りなさい、何人たりともこの地において血を流そうとする者は罪人でしかありません」
「おっおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

マリアージュの目に剣呑さが混じる、笑顔の質は変えずに宿る光は殺気混じりへと変わる
その光を見た男は腰のポーチから手榴弾を取り出し素早くピンを抜くと、雄たけびのような声と共に後ろを向き走り出し、そして…

手榴弾を投げつけた。

マリアージュ　その３

どの世界でもブラックリストと言う物はある。
解りやすいところで行けば、借りた金を返さないとか複数の金融会社からお金を借りるなどと言う金融業界のブラックリストや、特定のクレームばっかりしてくる商売におけるブラックリスト。
いわゆる警戒対象を集めた一覧表を言う。
まあ、どんな世界でもブラックリストと言う物はある…それが闇に染まった裏の世界でもだ。
この裏の世界においてのブラックリスト、それは通称「５５トライアングル」と呼ばれるリストである。
他の追随を許さない強さ、突出した頭脳、行き過ぎた残酷さなど裏の世界にすら恐れられた人間を書き連ねたモノだ。
では何故「５５トライアングル」と呼ばれたか。

最初は裏世界のあるギルドの人間が始めた事だった。
裏の世界は表の世界同様にいやそれ以上に生存競争が激しい、組織同士のいざこざや縄張り争いなど一つ間違えれば即死につながる。
話を戻そう。
そのギルドは情報収集に長け、その収集能力の高さと精度で生き残っていた
ある時、ギルドの一人が面白半分に紙に三角形を描き、それを５５のマスに分け「裏の世界の危険人物表を作ろう」と言い出したのだ。
そんな中、冗談交じりに製作者の一人が提案する。

「どうせやるなら、ありえないような事件ばかりでやろうぜ。」と。
無駄に高い情報収集と冗談半分で作った最初の表・・・それが最初のブラックリストになったのだ。

だが、作っているうちで製作者達は恐ろしい事を知ってしまう。
断片的に集めた情報が思わぬ風に組み合わされ始めたのだ。
一瞬にして光の塔の中に消えた研究所、それに関与した白銀の人影。
老舗の暗殺協会を一人で潰した少女の話。
身体を紙のように圧縮されて死んだマフィアのボス。
表に出せないイリーガルの実験施設を一晩で焼き尽くした青年。
某国の特殊部隊を忙殺した噂。

など・・・全ての事件の真相が色々な面から浮き彫りになりつつあった。
きっとそれは彼らの情報収集の高さと偶然からの産物だったのだろう、しかし世界はそれを許さなかったいや世界ではなく誰かの意思だったのだろう、それが完成し裏世界に流通する前に…その組織は消えた。
残ったのは詳細が書かれていない未完成の表のみだったと言う。
今となっては消されたか、危険を感じ自ら消えたのかは解らない。
ただ、その組織に残された通信記録にとある声が残っていた。

『手』と。

山と山の間。
反り返った絶壁の間、俗に言う峡谷。
その峡谷の間にある、川と並走する山道を男は走っていた。

（勝てん…あれは、神の花嫁…遥か昔に、東欧で音に聞こえた情報組織ブランケットが家の再興をかけ、フラムベルク家と結びつき作り上げた人間の形をした化け物。）

息を切らし、足を縺れさせながら命がけで走っていた。
男のその動きは訓練されたそれではなく、全てを忘れ恐怖に負けた人の走り。
ベースなんて考えれない、息が止まったっていい、今心臓が止まっても・・・この場から逃げなければ死。
そう思わせる走りだった。

（人智を超えた能力を持つ神に釣り合える女。それ故にマリアージュ［フランス語で結婚や結びつき食べ合わせの意味］と名付けられた女。）

横を流れる川の流れより早く男は逃げた。
一刻も早く逃げろと男の心が身体の限界を超えて走れと命令する。

（以前聞いた話５５トライアングルの話と実際に見たあいつの導士としての能力が今結びついた・・・間違いない奴が『西方天』であり、敵対する組織のヒットマンをことごとく文字通り潰し殺した『コンプレッサー』！！）

走る、走る、走る。
一目散に脱兎の如く。
だが、恐怖に負けてしまった男は振り返る。

すぐ後ろに居るのではないか、迫ってきているのではないかと恐れ振り返る。
きっと、それがいけなかったのだろう。
男は躓き、転んだ。
声も出さずに地面を滑る、峡谷の出口まで後数メートルと言う場所で男は倒れた。
ゆっくりと立ち上がり、何に転んだか解らず周りを見渡し、自分が何に躓いて転んだかを理解して・・・恐怖を深めた。
それは濡れていた人の身体。
男にとって、それはとても見知った身体・・・自分の部下達の濡れそぼった身体だった。

「うん、連絡どおりだ…君が最後の五人目かな？　別働隊の能力者の混成部隊…恐らくそちらが本命なのだろうけど、潰させてもらったよ」

唐突に声が峡谷に響いた。
それは透き通ったと言うには少し掠れた男の声だった。
男には音が反響する峡谷とマスク越しで場所が特定できない。
だが・・・どこかしら視線を感じ、その方へ目をやる。
峡谷の出口の傍の岩陰、そこに白い男の顔が浮いていた。

「ヒッ。」

一瞬生首かと見間違うが、それは違う。
顔の下に伸びる白いネクタイ、黒一色のスーツを来ているだけだった。
目を凝らせばよく解る、闇に佇む黒い男。
漆黒で染められた細身のスーツ、身長１７０ｃｍほどの細身の身体。
しかし何と言っても特徴的なのは、脱色ではない完全な白色の肌と

髪、真っ赤に染まった瞳。
世間では白子、アルビノと言われる色素欠乏症の容貌だ。
男は度重なる衝撃に心を砕かれたのか、それともその真っ赤な瞳に囚われてたのか動けないでいる。

「さて、君で最後だ・・・覚悟してもらおうかな？」

少々この暗闇に似合わない陽気な口調でアルビノの青年は笑顔で近づいてくる。
その笑顔はどこかで見た笑顔・・・男は漫然に理解した。

『コンプレッサー』と同じ笑顔。

理解した途端、口から声が出た。

「ヒッヒヒ」

一際笑顔を深くして、青年は立ち止まった。

「ん？　漠然と理解したかな？　したみたいだね。いや、したと言う事にしておこうかな？　僕も少々忙しいし、この後人と予定があってね君達には消えてもらおうと思っているんだ・・・ああ、気にしないでくれよ？　君達に命令を出した相手はもう解ってるし君と同じ運命だ・・・安らかに眠ってくれたまえ、部下諸共一蓮托生さ」

アルビノの青年の周囲に揺らぎが見えた。
男の身体は動かない、一生懸命身体は動いているのに逃げようと身体は動いているのに動かない。
目だけを動かしピクリとも動かない足を見る。
男の背筋が凍りつく、彼の足を細い手が土から生えて足首を掴んで

いた。
腕を見る、ゴツゴツとし毛の生えた手が腕を掴んでいた。
肩を見る、指輪を沢山した爪の長く長い指をした手が肩を掴んでいた。
身体を、
指を、
肘を、
腿を、
腰を、
首を、
手が掴んでいた。

「うっうわあああ

ああああああああああああああ！！！！」

「おやすみ、名も知れない君」

マリアージュ　その４

ザッザッザッ。　　ズルズルズル。

規則正しく大地を踏み締める音が、川の流れる音に混じって聞こえる。

それと同じく何かを引き摺る音が聞こえるが男は気にしない。

黒装束と言ってもいい位の真っ黒なスーツを着た男は、靴音の聞こえる川の上流へと目をやる。

ザッザッザッ。　　ズルズルズル。

そこには暗い闇の中に浮かび上がる白い陰、黒いスーツを着た男は目を凝らし、その陰の主が誰なのかを悟ると満面の笑みへと変えた。

その姿を傍から見ていれば、男の白さと闇に溶けたスーツの加減で宙に浮かぶピエロのようでもある。

ザッザッザッ。　　ズルズルズル。

白い陰はそんな黒いスーツの男の不気味さにも怯まずに、規則正しく歩いてくる。

いや、足音は規則正しくと言うより舞い上がった様なフワフワと言う擬音が当て嵌まる様な歩き方。

ザッザッザッ。　　ズルズルズル。

そしてピエロと白い陰が出会った。

唐突に・・・陰が・・・声を上げる。

「え…あの、こんばんわ、今日はお誘い頂きましっ！！　あたたたた！！」
「マリアージュ？大丈夫かい？」

舌が上手く回らずに、あまつさえ噛んでしまったマリアージュであった。

仄暗い峡谷の出口で、立ったまま固まっている二人。
マリアージュはマリアージュで緊張のあまりに今でも倒れそうな位に固まっており、男の方は優しげに微笑んでいた。

「済まないねマリアージュ。私から誘ったと言うのに遅れた上に、能力を全力で使用した反動で身体が動けないなんて…しまらないな」
「えっええ。いえっいえいえ大丈夫です！！　私待つのには慣れてますから！！　えと、えと私支えます支えますよぉ！！」

支離滅裂と言えば良いのか？錯乱しているのか？それとも願望なのか、浅黒い肌を真っ赤に染めて必死に意味不明に近いフォローをするマリアージュ。
それを見る男の目はとても穏やかで優しげだった。
そして、そんな二人を半眼で見つめる瞳が一対がボソリと言うには大きな声で呟いた。

「あんたら、いちゃつくなら他所でやってよ」

やや呆れ気味のソプラノの声。
二人が声のする方へ目をやれば、軽トラックに向かい黒装束の男達を片手で引きずる小柄な少女がいた。
その体躯は１５０ｃｍ程の肩は細く薄い、例えるならば中学生位の小さな身体。
それを支える小さな足には、薄い茶色を基調としたスニーカーと刺繍の入ったジーンズ。
オレンジのキャミソールに、肩にはベージュの薄いカーディガンを羽織っている。その上に乗るのは童顔の可愛らしい顔だが…眉間に皺が寄り口元が歪んでいた。

「しっ栞さん！？いつの間に！？」
「いつの間じゃないわよ…んしょっと。ずっと、あんた達が無差別に暴れまわった上に倒して気絶した連中を積み込む作業してたわよ、ずっとね。…うん、これで終わりかな？」

浅黒い肌を真っ赤に染めたまま狼狽するマリアージュをよそに、栞と呼ばれた少女は気絶している黒装束の男を軽々と片手で持ち上げ軽トラックに積み込んで整理している。
小柄な身体からは到底信じられない力、二人には見慣れているのか特に気にせずに話はすすむ。

「取りあえず『念願のデート』にさっさと行った方が良いわよマリア。あんたはともかく、砕破は飛ぶ鳥落とす勢いで成長している『サイファグループ』の長、新進気鋭の若き龍と言われる新会長様なんだから」
「デッデート…ってサイファさん、栞さんどうしたんですか？凄く機嫌が悪いみたいですけど…」
「この間、『守部』の仕事でブッキングした『霧島』と争ったらしいんだが…よく解らない…報告もそれ以外上がってない」

慌て取り繕おうとしたが栞の様子がおかしい事に気付いたマリアージュは、そっと砕破に寄り添い小声で会話を始める。
マリアージュが聞いた話の内容はこうだった。
とある非合法研究所に『仕事』で乗り込んだ栞は、同じく乗り込んだ男に阻まれ惨敗したらしい。
しかし、ただ惨敗しただけではなく、手加減された上に手玉に取られると言う彼女にとっては屈辱的な負け方だった。
それゆえの不機嫌、更にその不機嫌さ助長するのは冬なのに妙に暑い砕破とマリアージュの距離。
二人の距離はおおよそ２０センチ、離れたくないのと心のむず痒さで離れたい気持ちが拮抗しているそんな距離。
その甘酢っぱく微妙な距離に栞は降り払う様に言う。

「あーもう、うっさい！！　あんた達は見てて暑苦しい！！　二人はどっか行け！！」
「暑苦しいって何ですか、私はともかくサイファさんに何て事言うんですか！？」
「自覚してないてのは見苦しいわよ」
「自覚しています私は！！」
「アーハイハイ、二人とも止め、止め」

仲睦まじく寄り添って話す二人に腹が立ったのか、怒号を上げる栞。
それを受けて立つが如く、いつもの優しげな面が崩れるようにマリアージュがまくし立てる。
ようやく砕破が動ける様になったらしく、二人の間に入り込み仲裁した。

「もう、良い？砕破。一言言わせてもらうけど古から続く盟約に従って今持ち回りで私はここに居る、けれど立場上あんたとは敵側…

解る？」
「解ってますよ、栞さん。それでも我々は…」
「それじゃあ、観星さんの事お願いしますね」
「ホントにわかってる？…それじゃあ、交代は明日後に」

機嫌が悪い栞には余り関わらない方が良いと判断したのか砕破は、目で『妹を頼む』と合図するとマリアージュの手を引いて闇へと消えて行った。

「まったく世話が焼ける・・・。」

気を使ったのか、はたまた本当に腹が立ったのか不機嫌そうに言うと栞は傍らの草むらから巨大なリュックサックを取り出し担ぎ峡谷の闇へと消えていく。

甘い空気

そんなこんなで天の浮橋に今日も日が昇り、山の端が白く染まり、天照らす。

「ふぁ～あ、あうあうあう」

天高く輝く日の光を司る神の先祖たる主神『天御中星神』の直系、天中観星は太陽を見て盛大に欠伸を噛み殺していた。
顔の上半分に包帯を巻いたパジャマ姿だが、疲れ切った猫背と跳ね回った髪の毛は今の身体状態を如実に表している。
所謂一つの寝不足である。

「うー眠いー」

昨晩、とある世界で哺乳類をはじめとした動植物すべてに罹るウイルスが突如蔓延した。
ウイルスの性質は極めておかしく、人間であれば神経組織に寄生し意識が消し本能が前面に押し出され、身体全てを『死ぬまで』活性させる。
解りやすく言えば『ゾンビ』になるウイルスだ。

「面倒くさいものを作って…何考えてるんだろう。バイオテロ？
それともウイルスの特性を考えて人間の進化？　どちらにせよ迷惑だわ」

彼女の見た世界はウイルスの蔓延により滅亡寸前だった。
それに慌てたのが『その』世界の神だった。
神と人間の時間軸は大きく違う場合が多い、一番解り易い例が竜宮

城だ。
知っている人間も多い昔話の結末は、助けた亀のお礼に歓迎された『海神の住む』竜宮城から帰った浦島太郎は自分の居た時間軸と違う場所に帰ったのだ。
これは『海神の住む』場所と『人間の生きる場所』の時間軸が違うことを如実に示唆している。
それが今回の件に繋がった。
要するに、その世界の神が気付いたときには遅かったと言う事だ。

「しかし、助力を頼みたいって来た時はどんなのと思ったけど…丸投げとは思わなかったなー」

もううんざりとした様に肩を落とす観星だった。
他世界の神に助けを求められて行ったのは、これから起こる因果律の改変とその世界に生きる人間を助ける事だった。
大勢の人間や動物の命が失われおかしくなった世界の流れを因果律の大幅な改変し、それをスムーズに行う為にそれに関わる人間を助け人類を救済すると言う内容だった。
それをその世界の神がやれれば問題ないのだが、それが出来ないと言う物だから…観星は朝方まで手伝ったのだ。
寝たのは朝方、起きたのは先程だ。
自分の立場上、文句言ってもしょうがないかと声もなく呟きながら何時もの大広間への扉を開き…口を引き攣らせた。

ムァッと言う擬音が聞こえてきそうな甘い臭気が観星を襲う。

「うわっ何っこの甘ったるい臭いは！！」

寝不足の上に起きぬけにこの臭気はきついらしく、鼻をつまみながら臭いの元を探る。

臭いの元はすぐに解った、大広間中央に置いてある何時ものテーブルの上。
山の如く積み上げられたカップケーキ、紅茶を使ったてあろう淡く赤いシホォンケーキ、食べかけのクッキーにフルーツマフィンにスコーンにパンケーキ。
ところ狭しと並べられたお菓子の山、山、山。

「なっ何よこれ！？」

よく見れば何時もの席にはエルフェルトが、うんざりした顔で座っていた。
真っ黒いコーヒーの入ったカップを片手に、朝ごはん代わりのだろうか、切り分けられたフルーツマフィンを口にほうり込みながら視線である方向を指し示す。
そこには何時ものマリアージュの位置に、エプロン姿の小柄な少女がボールの中身を泡立て器で掻き回していた。

「栞ちゃん！！　いつ此処に！？」
「ん～今朝方？」

来るのは知ってはいたが余りの状態に驚いて聞く観星に、栞は掻き混ぜたボールの中身を搾り袋に詰める。
そして傍らにある巨大なリュックサックからクッキングシートを取り出し、搾り袋から一つ一つ間隔を空け搾っていく。

「何してるの？」
「メレンゲ菓子作ってる」

平淡かつ簡潔な返答に観星は以前あった経験則からある事に思い立つ。

「何かあった？」

搾り袋を握る手が一瞬止まり、スピードアップ。
まさに図星を指されたかの様な態度。
観星はため息を吐きながら自分の定位置へと腰を下ろし、隣の席で足を組んでふんぞり返ってるエルフェルトに尋ねた。

「何があったの？」
「知るか。私も起きたらいきなり手伝わされた。」

顔を見合わせた二人が栞を見れば、微妙に涙目になりながら自棄になったかの様に搾り袋を握っていた。

「重症だな、前回来た時は付き合い始めた男にフラれた時だったか？」
「そうそう、確か『自分より強く男前な君と僕とはつりあわない』とか言われて振られた時だったかな？　前回はたしかドンブリ地獄できつかったけど、今回のお菓子地獄もある意味強烈だわ。」

バンッ！！と唐突に立ち上がる栞。
内緒話が聞こえたかと振り返る二人にヌッとクッキングシートが出てくる。

「エル兄さん…焼いて。」
「お前なぁ…何度も言うが私を便利な調理機と…解った、解ったから涙目で睨むな。」

そう言うとエルフェルトは苦笑いをしながらクッキングシートに手をかざすと、一瞬にしてメレンゲが焼き菓子へと変わった。

と同時に広がる甘い匂い。
観星は慌てて自分の能力を使い空気の入れ替えを敢行する。
いい加減甘い匂いにうんざりと思いながら、先ほどのエルフェルトの表情はそういうわけだったのかと納得した観星だった。

間話　頂上決戦　一回目

時は遡る事、五日前の飛騨高山。
名古屋の北にある高山盆地の中にある町。
その中の森林の比率は高く、約九割近くと森林に囲まれている緑の町。
その町の端、深い森に囲まれた無機質な建物。

［館山科学技術研究所］

地下通路

栞は対峙していた。
目的の場所は目の前だった、１０メートル先に見える分厚く物々しい雰囲気を対爆扉の向こう。
彼女の目的は扉の向こう側に居るとされている、とある人物を倒す事だった。
ここまで来るのは彼女にとっては簡単だった。
警備員をこちらが認識するより先に一瞬にして打ち倒し、何十もの特殊合金製の扉を能力と励起法による力任せで難なく打ち壊しここまでたどり着いた。
そして後は目的を達するのみだった。
中に入り、この中である実験を行う中核人物を栞の両手に携えられた刀――小太刀――で切り倒すだけだった。

それには目の前に居る、扉の番人の様に立ち塞がる人物を打ち倒す事のみ。

「退け」

目の前に立つ長身の男が口を開く。
低く静かな声色だが、有無を言わせぬ力がある。
白銀に輝くレインコート、黒いインナーと黒いカーゴパンツに身を包んだ男。
コートのフードを深く被り目を隠す、その視覚的な異様さとは対照的に存在感は擦れる様な幽鬼の様に立っていた。

「あなた何者？」

栞が聞く言葉は男には届かない。
いや、彼女は最初から話が通じるとは露とも思っていなかった。
目の前の男から栞は自分と似たような臭いを感じ取ったからだ。
その証拠に男は開いたレインコートの左腰に手を持っていき、腰から鈍色の塊を引き抜く。
それは鉄の塊、二尺五寸の反りを持った刀剣。

「退け」

とりつくしまもなく、ゆっくりと持ち上げる切っ先は真っ直ぐと栞へと向く。
フードに隠れて薄っすらと見える眼光は剃刀の様に鋭く、射抜くように見ていた。

「それは出来ない相談ね！！」

爆発のような突進、それと同時に極限まで捻り込まれる身体。
ギインッと打ち付けられる鉄と鉄。
栞の左手に握られた小太刀が斜めに構えられた刀で止められる。
擦れ合うような軋る音が通路に響いた。
それはリノリウムの床を踏みしめる音であり、鉄と鉄が軋む音でもある。

「やるわね。それじゃあ・・・これはどう！！」

心臓狙う右手の刺突。
だが男は左足を後ろに引いて避け、同時に閃く左脚。
閃光のミドルキックは空を切る、栞の左脇腹を薙ぐように動く足は彼女の遥か頭上。

「あっぶな！！」

栞は左脚が閃くのを見るより早くしゃがんで避けていた。
そして男の足が伸び上がると同時に、栞の左の内薙ぎ。
だが男はトンッと右足一本の足首を使ったのステップを踏み軽く下がる。
その独特のステップに栞は目を見張った。

「…あんた、その歩法は…神道流…」
「退け」

見覚えのある歩法に驚く栞。
それもそのはず、その歩法は自分も無意識に行っている歩法だからだ。
だがそんな事は栞にとって、どうでも良い事だった。
己の今為す事を為すだけ、ただそれだけだと小太刀を握る手に力を

こめた。

「おもしろい…あなたと私の神道流、どちらが強いか勝負だっ！！」

ダンッ！！

再び踏み込む、今度は床を踏み砕き破裂する程の強力な突進。
先程の踏み込みとは比べようも無いほどの速さ。
周りに人間が居れば驚愕していただろう、それほど普通の人間なら目にも留まらぬ速さだったのだ。
だが、その人間離れした驚愕すべき速度をを叩き出した栞は逆に驚いていた。
異常なスピードと限界まで絞られた身体の捻り、それから生み出される神速の一撃が避けられたのだ。

「遅い」

一瞬にして栞の目的地へと続く扉の前に移動する男。
そして、栞と同じ様に体を捻り。
マズイと栞が思うよりも早く、

爆ぜた。

「！！！！！！！！！！！！！！！！！」

気付いた時には目の前どころではない。
胸の中央に突き刺さる足の裏。

「ガアッ！！」

瞬間的に身体を硬質化する『儀式』と励起法による瞬間的な肉体強化でガードしたが、１０メートル近くを刹那で跳び抜けるスピードから繰り出された蹴りは衝撃となり身体を貫いていた。
衝撃と共に吹き飛ばされる栞、その脳裏には蹴られた事よりも相手の動きが見えなかった悔しさだけ。
その事象を引き起こしたレインコートの男は靴音を響かせながらゆっくりと近づいて、倒れる彼女の目の前で見下ろすように止まった。

「…」
「…今の技、噂に聞いた霧島神道流蹴技『雷光』ね。…解ったわよ、退く、退くわ」

見上げながらやや自嘲気味に言う栞に投げかける視線は、酷く冷たく鋭い。
だが見詰め合う時間はそうも長くない、彼女の言葉を聞くやいなや踵を返し対爆扉を文字通り『切り裂いて』中へと踏み込む。

「ねえ、あなた名前は？　私の名前は守部栞」

男は歩みを止めて、振り返る。

「霧島葵」

男は呟く様に喋ると扉の向こうに消えていった。
白銀の陽炎を残して。

間話　頂上決戦　一回目（後書き）

白銀のレインコートや霧島の名前で気付かれた方も居ると思いますが内緒ですｗｗ
同じ執筆している『変わる世界』もしくは『いつもの日々に戻るまで』のとあるキャラクターの知り合いとなっております。

大地の神　落ち込む（前書き）

今回短いです。

大地の神　落ち込む

「で、何があったの？」

エルフェルトに容れて貰ったダージリンから口を離し、観星は話を再び切り出した。
切り出された栞は、四つ目のアップルパイをフォークに刺したまま口に入れるのを止めた。
ちなみに大量にあったお菓子の山は三人の腹の中で、残るは栞の前に在る半ホールのアップルパイのみである。
くよくよするより全部話してすっきりした方が楽になると思った彼女は、俯き加減で話始めた。

「この間、とあるルートから依頼が来て飛騨の山奥にある研究所を制圧に行った時に・・・『霧島』と名乗る奴とブッキングしちゃってさ。」
「あらら。」

あいつと出会っちゃったかと呟きながら観星は何があったかを、おおよそを悟った。
権謀術策が渦巻き暴力で支配される裏の世界において、『雷神』『閃光』と呼ばれる霧島と言う一族がいる。
身体能力が人類の範疇を大きく超えている超人を多く輩出している一族で、疾風迅雷の動きと『刹那の一撃』と呼ばれる剣術で、銃が台頭する裏社会を統べる剣神の一族であった。
さらに詳しく言えば血縁は全て『能力者』。

「『霧島』と言えば、あの事故で滅んだ一族じゃない？　その生き残りが居るとは思わなかったってのもあったんだけどさ。」

しかし、栞の言うとおり霧島と名乗れる一族は十年以上前ぐらいに、『とある事故』で本家とその主力部隊もろとも死んでいるのである。原因はいまだに『解らない事になっている』が、この世の主神たる観星は真相は良く知っている。
良くも悪くも『神』故に、ただ言えないだけだ。
観星はほんの少しの罪悪感を抱え、話を変える為に栞に話しかける。

「あらあら、最強の一角の名を冠する栞ちゃんが、いつになく気弱ね」

そう目の前にいる少女は霧島と同じ超人の一族の一つ『守部』の一人であった。
この二つの一族が出会ったと言う事実は、観星にある事を容易に連想させる。
『能力者』と呼ばれる人間は、その特異な能力を使う為か、その様な精神でないと使えないのか、偏執的に『頑固』な人間が多い。
確固たる意思、多種多様な人がいて、更に頑固な人間が同じ目的の違う仕事に着く人間と鉢合わせたらどうなるかは・・・火をみるより明らかで。

「戦ったのね。」
「うん。研究所内の敷地で派手に。」

それはそれはと相槌をうちながら観星は、目の前の少女の能力の兇悪さを思い出し、本当に派手に壊れたんだろうなぁと内心冷や汗かいていた。
少女・栞の『法師として』の能力は自分の認識空間内の空間歪曲、解りやすく言えば『相互間作用』を選択的に操作する力。
もっと解りやすく言えば、認識した対象をあらゆる方向へと引っ張

る能力。
戦場に於いて無敵に近い能力でもあるが、それ以前に相手が悪すぎる。
相手も同じ法師の能力者であり能力者として栞と同等力がある上に『神域結界』がある。
その為、力が十二分に発揮されない相手だ。

（小説内の専門用語が多いので少し割愛）

そんな時、新聞を読みながら二人の話を聞いていたエルフェルトが疑問を上げた。

「ん？　それじゃあお前、一体何で落ち込んでいるんだ？」

それは私も疑問と観星も頷く。
答えは簡単にそして簡潔に返ってくる。

「負けたのよ…」

溜息交じりの沈んだ声が重かった。

実力行使！！

「でさー仕事は失敗。一族の誇りに傷がって上役には怒られるは、一族最強も質が落ちたと長老衆には嫌味を言われるわ…もう、散々よ」

「それは大変だったねぇ」

ブチブチ文句を言いながらアップルパイを崩していく栞。どうやら落ち込んでいたのは、負けた事よりもその後の出来事だったらしい。

「まあ、それだけ栞ちゃんには力があるって事じゃない」

「力があるのも考えようよ？　純粋無垢な小さい時には強くなることだけしか考えなかったけど、いざ強くなって認められて組織に入ってみるとウザクて堪んない」

守部栞１６歳・・・この年にして世の中の世知辛さを知る。そして同じく似たような苦しみを知る人間がここにも一人。

「解る！！　解るわ、栞ちゃん！！　私もこの任に着いてから早六年、色んな事があったもの。」

拳を握りながら、観星もぼやく。

その脳裏には色々な事柄が浮かんでは消え浮かんでは消えとしているのだろう、唯一見えている口元が固く結ばれていた。

「普通ありえないわよ、何でうちの世界にこんなもんばっかり来る

かと…。そりゃあね、母さんから聞いてはいたわよ。この地は、あらゆる外世界からはじき出された『何か』が潮の澱みの様に溜まり噴き出す場所だって。でもね、巨大ロボットの残骸とか、怪しげな秘宝とか、訳の解んない無限再生を繰り返す化け物とか、意思を持った本とか…ハハハ。そう言えば宇宙戦艦や異次元の遺跡てのもあったわねえ…もう、うんざりエルが居なかったら辞めてるって」

「なんか、私とは方向性が違う気がするんだけど？」

「あのね、あいつらって時間とか関係なしに来るのよ！？　私だってある程度プライベートってのがあってさ、まあ大抵未来予測出来るから良いけど…たまに予測不能なヤツが来て授業中とか友達との約束が潰れたりとか！！　あーもう！！」

「ちょっと観星、聞いてる？」

完全に栞どころか普通の人間とは違う次元の悩みに入り込んだ天中観星１７歳、意外と苦労が多い１７歳。

突っ込んでも最早聞く耳が無い、更にヒートアップが続く。

そんな観星にそっとアップルパイを一かけら出された。

「まあ、これでも食べて落ち着こうね？」

宥める様に食べ物とお茶の追加を出す、だが剣幕は収まらない。

当然である、今の時点で既にはち切れんばかりにお腹に入っているからだ。

食べれる訳無い。

栞は宥めるのを諦めて話を聞いてやるかと腰を落ち着けようとした、その時。

二人は凍りつくような旋律の声を聞いた。

「ほほう」

力強い感嘆の言葉。
栞と観星は恐る恐る声の主を見て、顔を引き攣らせた。

「やばっ」
「マズッ」

その視線の先では腕と脚を組み獰猛な不適な笑みを湛えるエルフェルトが居た。
やや俯き加減で目元がよく見えず口しか見えないが、はっきり言って怖い。
呟く様に笑っている。

「クックック、お前がそこまで手酷くやられるとはな・・・面白い、それは面白いな」

獰猛なトラが唸る様な笑い声。
何が楽しいのか常人には解らない、それは仕方が無い彼は神なのだから。
好戦的な笑顔を張り付かせ、エルフェルトはまだ見ぬ男を想い拳を握り立ち上がった。

「ちょっエルフェルト！！　何戦う気になってるのよ！？　どっどこに行くの！？」
「そうそう」

慌てて止める観星、その声色は盛大に焦っていた。
エルフェルトは完全に戦闘モードに入っている為だ。
彼の身体からは薄っすらと湯気のような物が立ち上り、陽炎のように揺らめいている。
ここまで来ると、次の行動は炎の神ゆえ火を見るより明らか。

「で？そいつはどこだ？」
「一寸待って、エル兄さん？　ホントどこに行くの？」
「それは当然お前の仇をとりに？」
「真顔で嘘を言うなーーー！！」

余りの暴走に、何時ものボケとツッコミが完全に逆転しているエルフェルトと観星。
たまにこう言う事は年に何度かある、そういう時はマリアージュが凍るような笑顔で押さえてくれるのだが今回は居ない。
観星自身が使える最終手段もあるが、ハッキリ言って使いたくないと考えている。
だから取れる手段は限られていて、観星は諦めた様に栞にやれと合図する。
その途端、頷く栞の隣に――柄の長さ三メートル鎚の大きさは約一メートルの円柱――巨大な金槌が現れる。
金槌の側面、そこには細かくビッチリと古代北欧の魔術文字で雷と書かれていた。

「やっちゃって、栞」
「オッケー」

重さは一トン以上あるだろうその巨大な鎚を、栞は片手で振り上げる。

「エル兄さん？」
「ん？　こら栞、一寸待て！！　なんだそれは、オイ！！」
「問答無用！！」

栞は思いっきり振り下ろした。

次の瞬間、大広間に閃光が溢れる。
それは皮肉にも轟雷、『霧島』が司る大雷の光だった。

学園都市に行こう！！

カッカッカッカッと規則正しい靴音が板張りの床を鈍く鳴らしていた。
淡いクリーム色のスーツを着た肩幅の広い男が、扉が立ち並ぶ廊下を歩いている。
ガッシリとした顎周りと黒縁メガネの奥のぎょろりとした眼が特徴的だが、その振る舞いは何となく知的な雰囲気を醸し出す男。

「信じん私は信じなーい！！　そんな物理法則を根本的に覆す様な現象はミトメナーイ！！！！！！」

唐突に歩く男のすぐ前にある扉が勢いよく開いたかと思えば、同じスーツ姿の初老の男性が錯乱した言動で飛び出してくる。
何があったのかと男が部屋を見れば、講義を受けるための緩やかな傾斜になっている机達の一番前そこにはセーラー服姿の少女が机に座っているのが目に入る。
ハアッと男が半ばあきらめたように息を吐くと、再び規則正しい靴音をたてながら少女に近づいた。
その音に気が付いたのか少女は首だけを回しと振り返る。

「重金（おもがね）教授おひさー」
「妙な気配を感じたと思ったが、やはりお前か」

振り返った少女は奇妙ないでたちだった。
濃紺のセーラー服と少々短めのミニスカート、そこから伸びる細く白い足に黒いニーソックス…どこら見ても普通の女子高生だった。
問題は顔だった。
長く艶のある黒髪から伸びている不可思議な文字をプリントした包

帯が顔の上半分を覆っていたのだ。
言わずと知れた、この世界の主神『天中　観星』だ。

「妙な気配って酷いな、こうやって会いにきたのにその言い方って無いと思うなー」
「そう思うなら今さっき何があったのか言ってみろ。物理学の基山教授が錯乱していたんだが？」

重金と呼ばれた男が呆れたように言えば、観星は顔を明後日の方に向ける。

「いや～…此処に来る時に空間繋いだら、丁度今さっきのおじさんに会っちゃって」
「…何となく予想が付いた、お前…二空間跳躍接合の理論喋ったな？」
「あははー正解、今の時代で空間操作技術理論は受け入れられなかったー。流石に熱力学理論を無視するような話は駄目だったか」
「当たり前だ、まったく…ところで会いに着たと言ってたが何の用だ？」

観星はニッコリと見えている桜色の小さな唇を笑顔にすると、おもむろに顔に手を当てた。
スッと擬音語を当てればそんな感じに聞こえそうなほど簡単に手を動かすと、観星の顔から包帯が消えていた。

「ふむ、相変わらず凄いな」
「べっつに凄くないわよ。リミッター代わりの包帯は外せないから、その上からそう見せかけているだけよ」
「それでもだ。専門の儀式装具ではタイムラグがかなり起きる、幻影系の能力者であれば別だろうがな」

フーンと観星はわりとどうでもよさそうに鼻を鳴らす。
「来た理由は色々あるけど、重要な用件はこの間の解析結果聞きたいなーと」
「ああ、この間持ってきた妙な体液か…解析は終わっているが、何だあの物騒なレトロウイルスは？　何処から持ってきたんだ？」
「そんなに？」
「人間の神経に入り込み逆転写酵素により神経を支配、挙句の果てに元から居る細菌にもプラスミドを使い爆発的増殖をす…どうした観星」

ふと重金教授が気付けば観星は頭を抱えている。
やれやれと教授が頭をポンポンと叩けば、観星は軽く眉間を寄せた顔を向ける。

「少し難しいか？」
「物理系以外の専門的な話はちょっと…『知識の海』の方からダウンロードすれば理解できるんだけど、エルフェルトが『積み重ねの無い知識なぞ、ただのデータだ』って怒るから緊急時以外してないの」
「ふむ一理ある…まともな神が教育役をやっているようで何よりだ…丁度いい、毎回の講義のついでだ補講としてやるから今日の講義に出ろ」
重金がそう言うと観星はエーと表情を作りまたもや落ち込み項垂れる。

「さて。」

扇状に広がる巨大な講堂。
その扇の頂点でもあり、最下層にある教壇の前に立つスーツ姿の男が咳払いして話が始まる。

「君達、日本各地の教育機関から選抜され更に篩い（ふるい）をかけられ、アジア最高学府『辰学院』のサイファ学園都市分校に学びに来た君たちに『オメデトウ』と言って置こう」

やや芝居がかった滑らかな動きを交えつつ男は朗々と喋る。

「では早速授業に入りたいのだが、今日は入ったばかりの君達がこの学院の意義を知る為に先ずは辰学院の歴史を語り、それから授業に入りたいと思う」

辰学院の歴史は古い。
その時代の文献は残されていない為に正確な年代は解らないが、その歴史は世界の『アレキサンドリア　ライブラリー』『ブリテッシュカレッジ』『黄学府』にも負けない程だ。
だが、解らない事もある開校の時期だ。
辰学院内の歴史研究者でさえ正確な時期を特定出来ない程に古い。
その原因は遺跡研究の教科書の方に書かれているから、そちらを参

照する様に。

話が逸れたな。

しかし、正確な時期が特定出来ないだけではあるが大まかな時期は解ってはいる。

諸君、『古事記』は知っているな？

我が国に於いて天皇の勅命により太安万侶がそれまで口伝により暗誦されていた『帝紀』『旧辞』を編纂して作成した日本最古の歴史書だ。

その歴史書『古事記』の上巻、『天岩戸開き』の一説。

スサノオの乱行に頭にきたアマテラスは天岩戸に隠れる。

天を照らす日の神が岩戸に隠れた為に世界は闇に包まれ、悪い神々が騒ぎ出した。

それに困った神々はヤゴコロオモイカネに知恵を出してもらった。

さて、ここまで言えば解る者は居ると思う。

そこで何かに気付いたような顔をした君、解るかな？

・・・・そうだ、諸君らも知っての通り『辰学院』の学長の名前は『重金　慈心』だ。

重金とは古くから金属を扱い鋳造する一族と言われているが事実は違う。

正確には重い金と書く、隠し名の事だ。

金属に関わらずあらゆる知識を網羅する『知恵と知識』の一族。

これは近年では隠し名はポピュラーになっているので、こうやって言えると言う事を前提に考えて頂きたい。

この辰学院の歴史は、『天岩戸開き』の時期の前後、神代の時期から始まったと言われる。
古事記のその一説が実際あったと考えれば当時、問題ごとがあれば神々は『ヤゴコロオモイカネを訪ねる』と言う図式があったと思われる。
でなければ、アマテラスが天岩戸に隠れた時ヤゴコロオモイカネに知恵を出してもらうと言う事が、スムーズに起こる事は無いと思われるのだ。
この確定していない仮の事実は、ある推論をがでる。
その当時からヤゴコロオモイカネを中心とした何らかのコミュニティが形成されていると思われているのだ。

ああ、そう言えば私の自己紹介がまだだったな。
私の名前は『重金　浄』、この辰学院分校において儀式理論を担当する。
と、歴史の話もそこそこにして儀式の話をして行こうと思う。
それでは…儀式と言うものは…。

学園都市で話を聞こう！！

「であるからして、この雨乞いの『儀式』はすでに現代科学によってシステムが解明され、最もポピュラーな儀式と言える。解明された時点で『儀式』とは言いづらいのだが、スタンダードな儀式で広く使われていたと言う事でテキストに載せてある」

扇状の講堂、教壇に立つスーツ姿の男性がテキスト片手にカツカツと黒板に音を立てながらチョークで文章を書いていく。
男の講義はよどみが無くスラスラと、最初から決められていた芝居のように進んでいく。

「と言う訳で今回は古くから伝わる『儀式』として『占』と『雨乞い』を確率論と話術、気象学の観点から説明した。今日のはテストに確実に出るから、要点を纏めて覚えるように。次回は精霊信仰とシャーマニックから始まる『儀式』の講義なので予習をするように」

男がパタンと勢いよくテキストを閉めた途端、見計らったかの様に授業終了のチャイムが鳴った。
それに合わせて教室に居る生徒達は、授業のノートを纏める者や話し始める者、教室を友達と連れ立って出て行く者と思い々々に動いていく。
そんな中、男が立つ教卓の一番前の席に座る濃紺のセーラー服の少女が頭を抱えていた。

「何で一つの話に確率統計学と気象学、語学が混じって出てくるの～」

どうやら講義について行けなくて、彼女の脳がオーバーヒートしだ

しているらしい。
その証拠に少女の頭の頂点からは白い湯気がうっすらと立ち上っている。
その少女を見ながら、講義を行っていた男性はヤレヤレと息を吐きながらテキストを纏め近づいた。

「観星、大丈夫か？」
「もー訳わかんない」
「フフ、もうちょっと勉強しろって事だ。さて授業が終わったので、本題といこうか？　私の研究室で話そう」

ポフポフと少女――観星――の頭を軽くと男、重金　浄は笑う。

清潔な印象を持たせるクリーム色の壁紙、その壁紙に汚れが少ない所を見ると部屋の住人が頻繁に掃除しているのだろうと予想される。しかしながら、部屋の中は少し乱雑になっていた、デスクの上にはＰＣの大きなディスプレイにキーボードそれと所狭しと積み上げられた本の山。

「…なーんか、研究室って言ったら試験管やフラスコ、それに入った怪しい液体ってのが相場だと思ったんだけど…フツーのオフィスって感じよねー」
「お前の言っているのは一般的な化学系の研究室だな。お前の持ち込んできた物の性質を考えるとＰ４レベルの施設が必要だから此処とは別だ」
「いや、そう言う事を言いたいんじゃなくってさ…」
Ｐ４施設とは微生物や細菌・ウイルスを使い実験や培養を行うため

に、外界と隔離した特殊な研究施設である。
観星の持ち込んだ物の性質を考えると当然の話なのだが、少し場を和ませるための軽口をそういう風に返された彼女は苦笑いを返すだけだった。

「…相変わらず固いわ」
「何がだ。それより話を進めよう、座りたまえ」

浄に促されるまま備え付けの皮のソファーに座ると、観星は指を軽く鳴らす。
するとどうだろう、彼女のテーブルの前にティーセット一式が現れる。
カップの中にはすでに琥珀色の液体が注がれている。
それを見た書類を片手に来た浄は嘆息しながら言う。

「便利だが、少々感慨がなさすぎやしないか？」
「めんどくさい時は良いと思うけど。それって男性としての感性なんじゃない？」
「かもしれん。さて、一応の報告はこれに纏めてある。口頭での説明は？」
「頂戴」

雰囲気が変わる。
先程までの軽い空気とは違う、少し緊張感の漂う空気。

「では始めよう。お前の持ち込んできた『血液サンプル』から大量のウイルスが検出された。『この世界』にはいまだ確認されていないウイルスだが、ＰＣＲで増幅してシークエンサーでゲノム解析を行ったところ一番似ているのがこれ、リッサウイルス…狂犬病ウイルスだ」

「狂犬病？」
「９８％一致したからほぼ間違いないだろう。動物実験でサルを使った場合、痒みや風邪の症状から始まり神経症状が出た事も確信の一部だ。違ったのは恐水症の症状や神経系に重大な麻痺が起こらなかった事」
「他には？」
「人間の最低限の本能が残るという事ぐらいか？　ただ、これはウイルス自体が感染するための獲得した機構だと思う。マウスによる実験で共食いや性交による感染した事から、感染経路が飛沫感染から考えられると恐らくそうだ。予後としては発症後、ほぼ１００％に近い確率で死亡。後これは蛇足だが…名前をつけるならばゾンビ化ウイルスとでもつけるか？」

苦笑しながら浄は答えた。
それを聞き終えると観星は一つ溜息を吐く。

「どこから持ってきたとか聞かないのね？」
「我々『八方塞』を散々異界に飛ばし厄介事を治めさせたお前が言うか？」
「それもそうか」

この主神は少々厄介な存在だと、当代の『八意思兼（やごころおもいかね）』たる浄は理解している。
いや知っていると言うか己が身に刻まれていると言っていいだろう。
目の前の主神はこの世界の神の特性上、異世界に行っても圧倒的な力を振るえることを知っている。
それ故、他世界の神に頼まれ色々な世界のトラブルを解決するべく、この世界の神を派遣している事があるのだ。
浄はそれに何度も巻き込まれているが故だったりする。
さもありなんと頷く観星を恨みがましく見ると浄は話を継いだ。

「前々回に依頼してきた奴と絡めたかったから誰かを派遣して持ってきてもらったんだろう？　おそらく三剣あたりか？」
「はは、教授鋭い！！　正解！！」
楽しそうに笑う観星に浄は、『三剣の奴もご苦労な事だ』と呟き再び溜息を吐いた。

風神のご相談

「ブフッブハハハハ！！　ウハハハハハ！！！！」

世界の最果て体育館程に広い敷地の真ん中、アラバスタホワイトの床石に設置された六人がけの机と椅子の一つ。
その一つの上で、馬鹿笑いをする男が一人。
黒が少し入った金髪に碧い目、クリーム色の薄手のコートを羽織った二十歳前後の青年だった。
人を喰ったような『悪人顔』の表情を持つ青年、言わずとしれた三剣風文本人である。
彼は目の前にいる包帯で顔の半分を隠した高校生位の少女、天中観星にしきりに話し掛けていた。
彼女自身は、少しウンザリとした雰囲気を出していたが。

「で、俺は言ったわけだ。『天然と鈍感は罪だ』ってさ、これって馬鹿は罪だってのと通じるじゃないか？　前日に意味だけは伝えてたから、あいつはショックを受けたわけよ」
「それって周りの女性達も大変そうよね」
「いや、実際ヤキモキしてたみたいだ。　俺が言ったのに納得してたから。くくっ周りの反応と言われた事からやっと理解した奴の顔がときたら、鳩が豆鉄砲喰らったあの顔！！　ブハハハハハ！！」

机をバンバンと叩きながら大笑いする風文に、観星は『楽しそうで何より』と呟き湯呑みの中のお茶と共に飲み込んだ。
この天の浮橋には役目がある。
正確には天の浮橋に住む『主神　天御中星』こと天中観星はだが、彼女の役目は大まかに分けて三つ。
一つは主神として世界を見守る事、神たる者は世界に干渉せずに総

てに平等に接する。
ただ見守るだけの仕事。
二つ目は、神々を取り纏め世界を潤滑に運営させる事。
これは今は語ることは無い、後日語ることになるだろう。
そして三つ目、他世界のエネルギーバランスをとるバランサーとしての仕事だ。
一般に知られては居ないが、世界は無限に現れ無限に消えている。
大抵の世界は寿命で消えていっているが、観星達主神が危惧するのは因果律からの世界の崩壊だ……話が難しくなるので簡潔に言えば『生物を起因とするエントロピーの減少』を阻止する事にある。
やはり難しそうなので此処できろう、要するに風文を含む能力者達は観星により他世界へと使わされ、バランスをとっているという事だ。

「しかし休暇と称して色々な世界を回ったねぇ。どれくらいかかった？」
「大体１０年ぐらいかな？　神域結界と励起法で身体の老化を止めてなければ今頃もう爺さんだ」
「他世界へと出張してるメンバーの中でも最多だもんねー」
「お前が言うなお前が」

世界を渡る越界は本来かなりの危険が付きまとう。
大まかのもので言えば、時間の壁や法則の壁がある。
例えばＡの世界とＢの世界とＣの世界があるとする。
Ａの世界では１分、Ｂの世界ではＡの１０倍の時間が流れＣの世界では１０分の１だとしよう。
此処で問題だ、Ｂの世界の人間がＣの世界に行くとどうなるか？
正解は１００倍の時間の流れが、その人間にかかる事となる。

これに対しては色々な条件が更にあるので、全てに適応されはしないし一般的ではないのでこういう物があるとだけ覚えてもらっててい。
そして法則の壁とは日ごろ漫画やアニメをよく見る方ならば、うっすら解って貰えるだろう。
Aという漫画のキャラクターがBの漫画に出たとしよう。
二つの漫画は違う世界、同じように扱えるだろうか？
確率としては五割は無理だ、扱えないのが普通なのだ。
しかし、この世界の能力者は例外中の例外『神域結界』がある。
『神域結界』とは能力者全てが持つ『能力が使える絶対領域』の総称で、その領域内では能力者は『絶対知覚』『能力に沿った絶対操作』『能力者に適合した空間形成』を得る事となる。
解りやすくいえば、能力者は『自分の都合のいい世界』を身に纏えるのだ。

「しかし、今回も大活躍ねえ。向こうじゃ英雄扱いされて去りづらかったんじゃない？　主に女性関係で」
「それもこれも俺の魅力が悪いのか…ふう」
「ワザとらしい、解ってて言ってるでしょう…なんかムカツクわ」

『神域結界』内では能力者は最強となる、神のように振舞えるのだ。

「さて、報告は以上だ。何かご質問でも？」
「特に無いわ。会った事をすべて話してとは言ったけど…なんか殆どどうでも良い話のような気がするー。むしろ無駄？」
「自分から事細かにと言っただろうが、世界単位の面倒事を軽々し

く頼む奴は、少しぐらいこっちの苦労を知れ」
「いやそうだけどさー」
えへへと笑い誤魔化す観星に、風文は出来の悪い妹を見るような表情で溜息をついた。
「まったく…まあいい。話は変わるが、今回の報酬として一つ頼みたい事があるんだ」
「？　報酬？　珍しいわねいつもは戦うのみで何も文句言わないのに」
「そりゃそうさ。前みたいに戦うだけで解決する時期はもう過ぎたのさ、最近は状況が違うしな」
「サイファの方？」
「有り体に言えばそうだな、君の兄が立ち上げたサイファグループの運営は確かに上手く行っている。しかし、我々の目的を達成するためにはまだ手が足りないんだ」
今まで浮かべていた人の悪い笑みを収め、今までとは打って変わっての真面目な顔で風文は語りだす。
「トップの砕破をはじめ、情報収集の方は細目（さざめ）と言う日本の古くからの続く隠密の家から雇い入れた。開発や器械部門は重金（おもがね）や多々良（たたら）がいる。問題は実働部隊の方だ」
「実働？　始動したばかりの『大隊』は？」
「第一隊から第四隊までの教練と編成は終わったが、少々手が足りん」
「手が足りないって。この間聞いたときは５００人ぐらい居たんじゃないの？」
まあなと言いながら、風文は出された紅茶を飲み干す。

サイファグループ。
五年前ほど前から起業し、最近では短期間で上場した巨大企業。
工業や医療・広告代理店やシステムマネージメントなど多角経営が売りで、今日本において一番有名な企業である。
そのグループの立役者の一人が風文。
グループの闇を統べる、保安部門の長である。

「人員としては十分だが、俺自身の手が足りんのだ」
「風文自身の？」
「ああ、仲間や部下にも出来るが俺じゃなければ出来ない事だってある…もっと忠実に動く駒が欲しいそんな意味でもある。もしくはそれに代わる武器とかな？」
「人材かそれに代わる物って事ね」

フムフムと頷きながら観星は考える。
風文自身が一番解っているだろうが、彼は今とても忙しい。
部隊の編成・教練のみではなく、表側の役割であるサイファグループの一角である『サイファ総合警備』を経営しているのである。
手が足りないにも程がある。

「うーん…それじゃあ両方ってのはどうだろう？」
「はあ？」

ラビュリントス

迷宮。
それは古くから魔を内包するものと言われてきた。
魔を閉じ込めて災厄を閉じ込めるケルトの迷宮文様や、牛頭人身のミノタウロスを閉じ込めたクレタ島クノッソスの迷宮が良い例だろう。
また別の意味で、封じ込めると言う役割以外にも隠すという意味合いもある。
知られたくない物や隠したい財宝やらなんやら、そんな理由だ。
ＲＰＧゲームでよくあるアレだ。
そしてそれは、神の座『天の浮橋』の地下にもある。

「んで？　空間操作と言う力を使ったのはいいけど敷地面積６４ｋ？地下８０階、アトランダムな迷宮自己形成システムまで搭載して…てーか何でこんなに広大な迷宮作ったんだ？　今日び頭が悪い魔王でも、こんなめんどくさく自分でも迷いそうな物を作らんぞ？」

呆れた目で風文が言うとおり、その目の前には広大な地下空間。
彼の前ではゆっくりと動く昔のゲームに出てくるようなレンガ造りの壁、モーゼ宜しく海が開けていく様。

「それはね…」
「それは？」
「ロマンよ！！！！　…後、暇だったから」

エルフェルトも苦労してんなーと思いながら風文は、拳をあさっての方向に突き出す『妙なポーズ』をしている観星を他所に歩みを続けた。

「まあ、ロマンとか言う戯言（たわごと）は放っておいて。確かに迷宮は良い観点だ。此処にはそれほど危険なものを封じ込めているんだろう？」
「戯言って…真面目なのに」
「真面目に戯言を言うな、むしろ暇だったのが本音だっただろうが！！　…それは兎も角、此処はこんなに危険なモノばかりで固めないといけないぐらい、重要なものばかりなのか？」

溜息交じりの風文が見つめたその先、周囲――道を開く壁や床に――には奇怪な文様が刻まれていた。
それは、この世界特有の技術体系『儀式』の一つ『文様儀式』、特殊な顔料や染料で空間やモノに影響を与える『意味ある図形』を描き世界自体に作用を及ぼす『儀式』だ。

「領域内を一瞬で腐食させる『腐食儀式』に、鋼のように頑健な身体をチョークより脆くする『崩壊儀式』…うぉ、特定の場所に飛ばす『転送儀式』まである！？　構成上から考えるにかなり長距離みたいだが、何処に飛ばすつもりだ？」
「太陽…って嘘よ嘘！！　風文あんたね、自分で振っておいてひかない！！」

冗談交じりの発言とそれに返した観星に、首を振りを警戒しながら珍しく顔を引き攣らせてひく風文。
自分が宇宙空間にいきなり放りだされたかのように、ハッキリ言って恐怖の表情だ。

「お前の冗談は洒落にならん！！　お前の冗談のような都合で何回、異世界に飛ばされて命の危機にあったと思ってんだ…」
「えっと、八回？」

「十八回だ！！　…いい、もういい。お前に言う事自体が何か間違いのような気がしてきた」

こめかみを押さえ黄昏つつ歩く風文、過去に彼に何があったかのかは…彼のみぞ知る。
そして、二人の足が止まる。
動く壁に誘導されること約二十分、たどり着いた袋小路の一角に現れた扉。
扉には一つの厳しい文字で『保管庫（分類北欧）』と書かれたプレート。

「ここか？」
「そう、風文はこの地の性質は知ってるわよね？」
「身を持ってな…あらゆる平行世界や異世界に繋がり、次元の旅人や漂流者やが流れ着く吹き溜まりのような場所と聞いてはいる」

鍵を虚空から作り出し、観星は扉を開ける。
途端、扉の向こうから流れ出るムッとした埃の匂い。
年代を感じさせる匂いでもあり人が滅多に踏み入らない証明。
風文はその匂いに満足そうに頷く。
観星がパチンと指を鳴らし、保管庫の中に光を灯す。
そこは広大な空間であり、様々な物が所狭しとひしめき合う倉庫。
その中の一つを取り出しながら風文は眺める。

「クヴァシルにブルトガング…北欧神話系の神器…なるほど、ヴィンテージ物の漂流物か？」
「まあ、それもあるんだけど。それだと、整備が問題でしょう？
しかも、使い方が解らないし習熟まで時間がかかるモノばかり。風文は今使いたいし人材も求めてる…という訳でこれでーす！！」

行き着いた先は保管庫の一番奥、レンガの壁に立てかけられた布にかけられた何か。
それは緩やかなラインを持った人型のモノ。

「人形？」
「北欧神話に登場するロキが小人達を騙し作ったアーティファクトの中、唯一歴史に載らなかったモノの一つ」

剥ぎ取るように勢いよく布を取る観星。
そこから現れたのは、白磁の様でありながら柔らかさを持つ金糸のような髪を持つ『人間に良く似せられた』裸体の人形だった。

フレイア人形

「何だこれは」

苦虫を数十匹噛み潰したような声色で呟く。
目の前の全裸の少女、いや全裸の人形。
何故人形かと解るかと言えば、肩・肘・手首・膝・足首の関節に目を凝らさないと解らないほどの、機械の様なわずかな切れ目があるのだ。
だが全てが機械のようではなく人間の様でもある、それは柔らかで瑞々しい肌であり、流れる艶のある金髪であり、血色の良い色であったり。

「ん？　『小人』の一族・グノーシスの神代中期作品。最終的にフレイヤが自分の持つ館セッスルームニルを守らせた偽りのフレイヤ」
「ん？　偽りのフレイア？」

観星は近くの木箱を開け、色々な物を取り出す。
綿に包まれた物を子供を扱う様に、彼女は一つづつ丁寧に並べて置いていく。
それは細かい意匠を施された金の首飾りで。
それは金糸で剣と槍を象った手袋で。
それは黒い猫を意味するルーン文字を刻んだブーツで。
一式を見て、頭の中で該当するものを探しあてて風文は顔色を変えた。

「ブッ、ブリーシンガメンにサンダージャベリン、フレイムソードに猫の戦車だと！？」

「はーい、正解。遥か昔、ヨーロッパの古き神代の時代、フレイヤがブリーシンガメンを貰う対価に小人に抱かれたのは知ってるよね？　その時のフレイアの態度に癪に触った小人が、ブリーシンガメンに一つ細工して、後々この人形と今着させている装飾品を贈ったらしいのよ」

風文が驚くのは無理がなかった、彼の言った装備は全て遥か神代に実在した北欧神話の女神が所有していた物だからだ。
嬉々としながら人形に服を着せている彼女としては、人形遊びの延長線みたいで楽しくなっているのだろうが、話は止まらない。
話の内容はこうだった。
金の首飾りを得る為に身体を差し出した、そんなフレイヤに癇に障った小人の取った手段は嫌がらせだった。
フレイヤに似せた人形をフレイヤ自身に贈りつけたのだ。
何も穢されていない処女の人形を。
彼女自身に対し、何の穢れもない白い人形。

「また碌でもない嫌がらせだな。小人は女性に偏見でもあったのか？」
「私は知らないわよ、かなり昔の事なんだし。一応知ることはできるけど、知りたくもないわ。話は続くけど…」

当然、フレイヤは八つ裂きにして焼き尽くさんとばかりに怒り狂った。
それは自分の部下たるヴァルキリー達やセッスルームニルに住むエインヘリアル達に地の果てまでも探せと命じるほどに。
追跡者達は何日も何日も探した、しかし小人は地の底に隠れ住む一族の為に見つからない。

「諦めかけた時、フレイヤは自分のブリーシンガメンと自分の姿を

模した人形が共鳴することに気付いたのよ」
「共鳴器か？」
「そう、人形の動力核とブリーシンガメンが共鳴して人形が動く仕組みになってたの」
「…性格が悪いにも程がある。フレイヤ怒りを通り越して、血圧上がりすぎでぶっ倒れたんじゃないか？」
「まあ話によれば怒り狂うの通り越したらしいわよ…酷い話よね。でも、そこはそれだったみたい。人形の性能が凄すぎて、休みたい時には身代わりとしてオーディーンの前に出してたらしいわよ？」
「この装備が、その理由か」

風文の目の前に何時の間にか服を着させられた人形が一体。
ノースリーブのワンピースに肘までの手袋、黒のブーツ・・・それが金髪に妙にミスマッチしている。

「そう、雷の槍を打ち出すサンダージャベリン。大地より炎を突き立てるフレレイムソード。無音かつ高速の機動力を誇る猫の戦車。」
「この一体で軍隊と戦えるんじゃないか？　…たしかフレイアの兄がヴィクトリーソードも持っていたな…装備としてはあるんじゃないか？」

冗談交じりに言う風文に観星はニヤリと笑う。

「持ってるわよ？　正確には持っていたらしいんだけど今は見つかってない…っとこれで整備完了はい風文。」

何時も間にかに整備までしていた観星は風文に首飾りを渡す。

「何？」
「起動キー。最初に掛けてもらった人が主になるって話」

「ふむ」

風文は気にせず受けとったブリーシンガメンを、無造作に人形に掛けた。

それが致命的なものだったと知るまで後わずか。

インプリィンティング

主神が実用性に、趣味と道楽を追加した暗く湿った地下迷宮。
そこは観星と風文が入った直後とは違い、ネガティブな雰囲気が一変していた。
明かりは暗く、空気は重く、一切の音が無く、長時間いれば気が狂いそうになる空間。
通路の奥には闇が澱み何かが蠢いているかの様に錯覚する程。
そんな地下迷宮の一画では、今か今かと何か出てきそうなおどろおどろしい雰囲気とはミスマッチな声が響いていた。
それは女性の泣き声で、何かから開放されたかのような泣き声。
薄暗い地価迷宮の中で目を凝らせばペタンと尻を床に付けシルバーの瞳を濡らし、幼子の様にワンワンと泣いている女が居た。
童謡の犬の警官ではないが、泣く女にホトホト困ってしまっているのは少し彫りの深い顔付きをした男、三剣風文。
彼は女の前に立ち、片手で眉間を揉んで悩んでいた。
それは女を慰める事ではなく、今からの事。

「ふえええ」

風文は疲れていた。
原因は、何時もの如く突拍子も無い事を言う我らの主神。
右手には剣を象り左手には槍を象った意匠をした肘まである手袋、足には猫をイメージした模様が入ったブーツを履いている長身の女性が、かれこれ３０近く泣いていれば聞いているほうは疲れるのは当たり前。

傍目から見れば、風文が泣かしたのだろうと思うだろうし早く慰めろと言う声も聞こえてきそうだが、ところがそうはならない。
此処は暗く湿った地下迷宮の中であり、彼女の後ろにはズタズタに切り裂かれ砕かれ、こんがりウエルダンに焼かれているトカゲのような巨大な生物が居るのだ。
突っ込める人間が居ても何処から突っ込んで良いか解らなくなる様な状況。
だが彼にとっては、もうどうでもよさそうだった。

「予想外にも程がある。何が有能な部下になるだ…なんて危険物を…」

慰めるとか今の状況なんて彼にとってそれどころでは無い、今から予想される苦悩で頭を抱えていた。

回想　三時間前　『保管庫（分類北欧）』内。

「？？」

風文はソレを最初に見たときよりも顔を顰めさせた。
それは女性を象徴する豊満な体を持つイメージとは、とてもアンバランスな表情だった。
あえて言うならば、親鳥を始めて見た雛鳥のような表情で普通の人間にとっては可愛いだけなのだが、風文にとってはとんでもない程の不安を呼び起こすようなモノ。

「みっ観星？」
「なに？」
「一つ聞いて良いか？」
「いーよ」

ほぼ的中しているであろう、確定まがいの答えをあえて聞く風文。
この場合は、寧ろ来ると解っているであろう災厄に対しての気構えとでも言うべきだろう。

「フォーマットはしたのか？」
「したよ？」
「…記憶の方は？」
「当然」

最悪だと頭を抱える風文。
大きな問題があった、記憶が無いという事は経験が無いという事だ。
人形の由来『フレイヤの代わりにオーディーンの前に出した』と言うならば、遥か昔の神々の戦い『ヴァン神族』と『アース神族』との戦闘に借り出されていたはず。
それならば交渉事や戦略、戦闘に関して優れているはず。
護衛対象に付かせるのに、これほど心強いものは無いはずなのに。
完全にフォーマットされていると言うのであれば…。

「まさか…雛鳥と同じで、一から教えないといけないと言うんじゃなかろうな？」
「流石、風文。自在にＩＱＥを変動させるが測定不能の男と言われるだけあるぅ。大丈夫、大丈夫。道具の扱いは最初からインストールされているらしいから。」
「当たり前だ！！使えんで…何が！！？？」

少し声を荒げながら話していた風文は、そこで気付く。
何時の間にかに人形の瞳が開いていた、シルバーの虹彩が大きく風文の方向を見て潤んでいた。
涙目で風文を見る大人の身体をして少女の様な表情を持つ彼女は、彼に詰め寄りながら一気にまくし立てる。

「わわっ私、使えませんか？　不良品ですか？　失敗作ですか！？」
「え？　あ？」
「あーあ。風文泣ーかした」
「ちっ違うだろう！？」

慌てる風文。
それはそうだろう、見かけは金髪美女で幼子のような表情して泣かれれば普通は戸惑う。
それとは対照的に観星の言った風文と言う言葉に敏感に反応する人形。
どうやら自分の主の事を知り反応した様子だ。

「マスターの名前は風文、風文、風文……」

人形は突然踞りブツブツと呟きながら風文の名前を反芻する。
それを見て風文はボソリと呟くように観星に言う。

「観星、多分こいつ物覚えが悪い」
「製造年代が６０００年前だからねぇー」

途端人形は、バネ人形よろしく跳ね上がる様に立ち上がると風文に詰め寄る。

「私、物覚え悪いですか、馬鹿ですか、うろんですか、とろいです

か？　使えませんか！？　ああーマスターにご迷惑を失望させてしまったー！！！！！！！　こんな私はきっと廃棄だ遺棄だ産業廃棄物になってゴミの山に放置されるんだー！！！　マスター、どうか御慈悲をっ！！！」

言うだけ言って感極まった人形は風文の胸に縋り付きながら泣く。
今までに経験した事のなかった事態にフリーズする風文は、ギギギと錆び付いたブリキ人形の様に観星の方へと首だけ動かし向き。
ゆっくりと手刀を振り上げ、何？という風に首をかしげた観星に振り下ろした。

「とうっ！！」
「あたっ。主神に何すんのよ。最高の攻撃力を提供してあげたのに。」
「…本気で言っているのか？」

振り下ろした手刀そのままで観星の頭を鷲掴みする。
本気で言っているのかと言っている様に手に力が入っていく。

「マジもマジだよ？　アダダダ、とりあえず試験的に戦ってみれば良いんじゃないかな？」
「何と？」
「これ」

観星の頭を掴んだ手が空を切る。
風文が瞬きをした瞬間のことだった。
一瞬にして、掻き消える観星。
それと同時に地下迷宮に声が響き、天井が高くなり壁が一斉に動き始める。
そして、地下迷宮の一角が広くなり巨大な足音が風文達に近づいて

きた。

広がる薄闇の向こうから何かが近づく、滲み出す様に闇から現れる何か。

ヌラヌラと光る土色の鱗。

重い足音と共に聞こえる『ナニかが』大地を抉る音。

巨大な吐息と、生臭い匂い。

「おいおい…、試金石にしちゃ豪勢だな」

引き攣り交じりの風文の声に反応した人形は、彼の胸から頭を離しソッと音のする方向へと振り向き硬直する。

「あっあああ！！」

「あんまり、騒ぐな。たかがドラゴンだろうが…それとお前の性能試験だろ、がんばれ？」

そこにいたのは、とても大きな、ドラゴンだった。

「ひえええええ！！！！！」

儀式宝具

ドラゴン。
龍。
ナーガ。
リンドブリム。

西洋や東洋に限らず人と言う存在に対し、恐怖や崇める対象になるモノの総称。
ドラゴンと言う名前は悪魔を意味する場合もあり、西洋に於いては忌みすべき対象。
人間に対して相対することは絶対の死を意味する、それがドラゴンなのだ。
だからこそ、フレイヤに似せた人形が目の前にいるドラゴンを恐れ風文を盾にして隠れるのは悪くはないはず。
むしろ正常な反応と言える。
だが、グワシッと風文は自分の背中に隠れるフレイヤ人形を容赦なく目の前に掴み出した。

「ヒャー！！！」

甲高い声を上げるフレイヤ人形に頭痛を覚えつつ風文は言う。

「何がヒィーだ。たかが若年ドラゴンが何だ。ファーブニルじゃない分ましだろう？」
「だっだだだって、ドラゴンですよー！！　火をボォーって噴いたり、あのトゲトゲした尻尾でドカンときますよ！！　それで私は抵抗してもきっと堅牢かつ強固な鱗に阻まれて頭からガリガリッてかじられてマズイって、私捨てられてスクラップー！！！」

何か考え事をする仕種をする風文は、一つ思い付いた様に頷くとフレイヤ人形の首根っこん掴む。

「へっ？　マスター、何で私を掴んでいるんです？」
「いいか人形。一つ間違いを正してやる。お前の持つ『儀式装具』サンダージャベリンとフレイムソードは今でも昔でも裏の神話で語り継がれる一級の強力な武器だ。サンダージャベリンは最大出力で放てば一撃で城壁に大穴を穿つ、一降りで数多の敵を灰も残さず焼き尽くしたフレイムソードもしかり。そんな強力な武器がドラゴンに効かん訳が無い」
「へっでもでも」
「御託は聞かん！！行ってこい！！　いいな！？」

そこまで言うと風文は、掴んだ手を背中に回しフレイヤ人形と背中合わせになりながら自身を回転させて。

「ひえっ！！」
「三剣神道流　颶投げ！！」

緩い放物線を描く様に、おもいっきり投げた。
その線の先は恐ろしい竜の顎の真下。

「ひっひえええええぇぇぇ！！！」
「がんばれよー」

投げ出されたフレイヤが、アイタタタと頭を押さえながら立ち上がると目の前には恐ろしげに立ち並ぶ巨大な牙の群れ。
此処までの急激な話の流れ、突然の戦闘に目を回してしまうフレイヤ人形。

その時だった。

カチンッ。

歯車が一つ噛み合った音が響く。
間隙に落ちたような音と共にフレイヤ人形がフラリと起き上がり、
淡く輝いた槍を象った紋様が描かれた手袋をした腕を、ユラリとドラゴンを指差すように目前に持ち上げた。

バチ。

爆ぜる音。

バチバチバチ。

最初は焚火で枝が爆ぜ程の小さな音が、次第に激しさを増していく。
呼応するようにフレイヤ人形の回り、踊るように顕れる数十の光り輝く球。
それを見て風文は唸り呟いた。

「球電か」
『その通り。雷が落ちる時に現れる大気イオンで出来た雷の渦。最大1億ワットのプラズマ球！！　喰らったら一瞬にして灰になるわよ！！』

風文の呟きに応えるどこか楽しそうな姿を見せない観星の声。
観星の声に触発されたか、その威力を見せ付ける様にフレイヤ人形は前に挙げた手を水平に振り払う。
と同時にフレイヤ人形の周囲に浮かんでいた光り輝く球『雷球』が、紡錘状――槍の様――に伸びドラゴンに雨霰と降り注いだ。

雷の槍がドラゴンの鱗に触れるや否や、雷は着弾して爆煙が立ち込める。

「ふむ、少なからずとも効果はあるようだが？」

『当然、無いはずは無い！！』

「しかし観星。お前はドラゴンについて思い違いをしてる。多分エルフェルトの所為だろうがな」

『へ？』

「普通ドラゴンと言うものは倒す事が困難だ。ドラゴンの最大の特徴を知っているか？　それは苛酷な環境にも適応できる生態だ。世界の事象の基礎、法則と共に息づく生物といっても過言じゃあないドラゴンが、あれで傷つけられると思うか？」

『『五法』ね。世界の根幹を司る事象たる五法。水法、凝集　垂下　螺旋を司る。　光法、空間　粒子　虚空を司る。　火法、放射　炎上　化合を司る。　土法、引力　結晶　固定を司る。風法、伝播　分解　振動を司る。五法をもって摂理と為さん』

「だったら解るだろう？今あいつが使っている雷はどんなに強かろうと『風法』に属する。そして、あのドラゴンは」

『アースドラゴン…『風法』に属する雷に対する『土法』を根源的に持つ……あはは、忘れてたー』

虚空に響く声はどこかしらごまかしを含む、それを聞き風文は馬鹿が…と呟きながらフレイヤ人形を見る。

そこには完全に人格が変わり、冷ややかな瞳を持ったフレイヤ人形が晴れていく土煙を眺めていた。

晴れた土煙から唸る声。

「こっちの口伝ではない生態の竜か。見るからに異界からつれてきた竜だな？　竜族の魔法…この世界で使えるのか？」

『大丈夫、そこら辺は何とかしてるわよ。だから風文？』

「解っている…吹け、風よ。」

何かの気配を察知したのか風文は振り祓うように腕を振る。
唸り声が止まり土煙から飛び出す巨大な水晶で出来た無数の槍。
それに合わせる様に、風文の手から吹き荒れる暴風が槍を吹き飛ばす。
冷ややかに水晶の槍を見ながら、槍と共に吹き飛ばした土煙の先を見る、そこには所狭しと駆け回るフレイヤ人形。
その動きは猫の様に飛び回り、ドラゴンの目の前の大地から発射される水晶の槍を機敏に躱し続けていた。

「すげーすげー、強力な俊敏さを持ち主に与える…あれが『猫の戦車』か。てーかありゃ猫と言うか豹だな」
『そして残るは大地すらも焼き尽くすフレイムソード！！』
「お前ノリノリだな」

ダンと一段大きく跳ぶフレイヤ人形、空中に躍らせた人形と思わせないような豊満でしなやかな肢体、その右手は大きく掲げられていた。
人形の口元には大輪の花を咲かせたような笑みが一つ浮かび、そこで人格が代わってからフレイヤ人形は初めて口を開く。

「フレイムソード！！」

風文はその光景に目を剥いた。
フレイム、炎とは程遠い程の黄色い光の弧が描きドラゴンを薙ぎ、その軌跡が一瞬にして斜線上を焼き尽くしたのだ。
残ったのは焼き切られた竜のみ。

「観星…あれはフレイムとは言わん、黄色の炎は６０００度…一瞬

だったから良いが…範囲内だったら余剰エネルギーでも人が死ぬレベルになるぞ、俺まで焼き尽くすきか？」

そして前話の冒頭に戻る。
戦闘モードから通常のモードに切り替わったフレイヤ人形の泣き声と、その主たる三剣風文の苦悩を含んだ長い長い溜息が地下迷宮に響く。
フレイヤ人形にとってはいきなりドラゴンの目の前に投げ出されたと言う理由であり、風文においては人形の武装が洒落にならない程の威力の為に運用出来る状況が少ないのが原因だった。
難しい顔をしながら風文は、誰もいない虚空に尋ねる。

「クーリング・オフは効くのか？」

やや呆れ気味の風文の声に、泣き声が止まりビクリと身を縮こませるフレイヤ人形。
自分の進退を決めるような一言なのだ、気にもなるのだろう。
ただし、評価はかなり低いが。

『共鳴器を介した契約だから綺麗に契約を切るのは無理だよ。まあ力技で出来ないこともないけど、その場合は人形がスクラップになって再び御蔵入りだけど、いいの？』

壊れると言われると押し黙る風文は、内心軽く諦めた。
このまま契約をしたまま観星に預けて去ると言う選択肢もあるのだが、このフレイヤ人形の仔犬の様な性格から考えるに多分ついて来て自分の指揮する計画にイレギュラーを発生させるに違いないと風文は考えた。
チラリとフレイヤ人形の方を見ると涙を湛え『スクラップにして捨てるの？』と言う表情をして上目遣い気味に風文を見ていた。

大人の肉体で捨てられる仔犬の様な目をされれば、スクラップ同然にして倉庫送りにするのは気が引けた風文は、人に決められて後悔しないように口を開く。

「解ったよ。この危険物は引き取る。共鳴器の出力が高すぎて使い勝手悪いみたいだけど、何とかするさ。この『風天』の三剣がな」

「マスター！！」

感極まって風文に抱き着くフレイヤ人形。

その姿は飼い主にじゃれつく犬のようだが、フレイヤ人形の身長が風文より高いために獲物に襲い掛かる女豹にしか見えないのは御愛嬌だ。

『よかったね……ちなみに人形に戦闘を慣れさせる為に地上に戻るまでに１０匹程ドラゴンを放してるから。コレって親切心だよね？』

「ちょっと待て、配置って何考えてるんだ！！？？　こいつは情報戦用に鍛え上げるつもりなんだぞ！！　戦闘力だけ上げるって現実意味無いにもほどが、ゲーム感覚でやってないか！！　おいこら、観星！！」

最後の最後まで観星に振り回される風文だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7328l/

神遊び唄

2011年12月8日00時46分発行